
高速郵便船ボイシアナ号——魔界の住人——

歩海ハヤセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高速郵便船ボイシアナ号——魔界の住人——

【Nコード】

N4580R

【作者名】

歩海ハヤセ

【あらすじ】

電波は遅すぎて使えない。手紙が宇宙をかけめぐる。空間転移航法によって恒星間飛行が可能になった時代。超光速通信が理論的に否定されたため、通信は、電磁波ではなく、郵便船で運ばれるようになった。

手紙とデータと雑貨を積んだ乗組員たちは、宇宙の空虚さに圧倒されながらも、配達のために航路を進んでいく。高速郵便船『愛しきボイシアナ』に乗り組んだ新米主人公と乗組員たちの日常と冒険。

全12話

高速郵便船

高速郵便船

目を覚ますと、猫男が私にくっついていた。

私の寝袋の外から腕と足をからみつかせて、すやすやと眠っている。

横にある安心しきったような寝顔が可愛い。でも、男どうしなのだ。

遠慮しておく。

船長に言われたとおりに、私は寝袋の中で脚をまげて、思いきり猫男の腹を蹴とばしてやった。

「んにゃ！」

猫男は悲鳴をあげながら、一気に床まで飛んではずんだ。その反動を利用して空中で姿勢を変えると船室のドアの開閉ボタンを押した。横に開いたドアの縁に足をかけるとはずみをつけて、通路をめざして逃げていった。無重力の中で羽のない天使のように宙を飛んで出ていく。彼が着ていたピンクのネグリジェと、そこから突き出たふくらはぎが目に見えついた。

ふー。今朝も猫男が私の船室に忍びこんで来た……鍵はちゃんとかけていたのに。

もう、こんなことが三日もつづいている。

私は安眠用の拘束スリングをといて寝袋から抜け出した。

私が使っている個人用船室は、二部屋あって、ひとつは住む部屋、もう一つは寝る部屋になっている。入り口のロックをはずさないと他人は入れないはずなのに。

乗組員のプライベートを保護するためだ。それなのに……船長は、ボイシアナ号の停滞に、だいたいらついているようだ。

また、こないやがらせをしてきた。

眠い目をこすって噴射式シャワーを浴びる。船室のくぼみを利用して作られているけれど、古い船では、けっこうな贅沢装備だ。

あたたかい水のジェットで、クリーム石鹸の泡を落として、エアの流れで体を乾かしているあいだ、つくづく、自分の才能のなさを恨んだ。

——もし、父と母が、もつと頭が良くて体力があつてスポーツができて明るく積極的で、リーダーの資質があつて規則を守れて、きちんと早起きできる人間に、僕を生んでくれていたら、いまごろネイビーブルーの制服を着た宇宙艦隊の士官にもなれたのに。

でも、現実は厳しい。

私には、ぼろ船の雑用係兼郵便主任が、せいっぱいだ。

それでも、三百人以上の希望者の中から、ただ一人選ばれた。

ハイスクールを追い出された私が、船員募集の広告を見て、ためしで応募してみたら、受かってしまったのだ。

家で晩ごはんを食べているときうちあけたら、父も母も、そしてちかごろ、私と目を会わせようとしない生意気な妹も、笑って信じなかった。出発するまぎわまで冗談だと思っていたらしい。

でも、静止軌道への打ち上げロケット場でのお別れでは、三人ともテレビ画面のむこうで

「宇宙船の人は変わり者が多いから、気をつけなさい。みんななかよくね」

「いやなことがあつたら、いつでも帰ってこい。でも、遅刻はするなよ」

「兄ちゃん、早く帰ってこないでね」

と、両親は妹の両側に立って、妙に深刻な顔で見送ってくれた。

可愛い息子が宇宙にでる。父も母も心配だろうけれど、内心では喜んでいたはずだ。

なにしろ、高速郵便船の船員だ。これからの宇宙時代には前途有望な職業だった。女の子からも注目の的になれる。たとえば、下っ端の雑用係でも。

それうえ、ぼろ船だろうが三年勤めれば、二級船員証がもらえる。船長の推薦状があるなら、その半分の時間で資格受験の権利が手に入る。

実務期間をこなせば、あとは努力と勉強次第で——必要ならコネとカンニングも使って——技能資格がとれる。

知的な香りに満ちた環境主任。

小惑星をひらりとかわす操縦士。

黄金の指を持ち、空間の魔法使いと呼ばれるドライブ主任。

無骨な指でスバナを握る機関士もカッコいい。

船の位置を特定する、勘と度胸のスクヤナ！

何にだってなれるはず。

それなのに……

それなのに……

……それなのに、私が胸を躍らせて乗り組んだ高速郵便船『愛しきボイシアナ』は、はつきり言えば魔界だった。

船長は心の邪悪な魔女で、操縦士は装備マニアで薬にいかれていて、ドライブ主任は情緒不安定な、なりきり妖精で、保安主任は人の形をした寂しがり屋の猫だった。

ため息をついてから、青い作業服を取り出して着た。胸に明るい赤で郵便マークがついている。足には磁石つきの安全靴をはく。準備完了。

でかけるついでに、鏡のまえで、髪をなでつけた。きょうは、ちよっとふんわりした感じに仕上げてみよう。

さて、また停滞の一日がはじまる。

『私』は個人船室から通路に出た。まず食堂へ行かないと。

私は早起きした。私は電磁靴の目盛りをさげて、吸引力を下げた。『私』は……これから、朝ごはんだ。

なぜ、地球にいたときの懐かしい『僕』は、宇宙船ボイシアナ号の魔界で『私』になってしまったのか？

宇宙にでて、その空虚さに向きあうと人は性格が変わる、と言われていたけれど、『僕』の場合はちがっていた。

ホイヤン船長が

「変えろ」

と無理強いしたからだ。

『僕』のほうがよっぽど良いのに、『私』が船長の好みらしい。最初のテレビ面接のときにビシリと言われた。あの時、気がついていれば、こんな船で安い給料なのに、こき使われて苦労しないですんだのに……

もちろん、『僕』は船長の命令に反発した。一人称はどう使おうと私の勝手だ。船員の正当な権利の行使でもある。私なんてのは、とても年寄りくさい。私は『私』が大きらいだ。

ボイシアナ号に乗り組んでからも、断固として『僕』を使っていたのだけど、そうしたら、船長しかアクセス権をもっていない個人船室の入室用暗証番号を、なぜか保安主任の猫男が知るようになった。

八桁の暗証番号を破って、毎晩忍び込んで抱きついてくる。

朝、起きたとき他人がとなりにいる驚き。

そのことで私が船長に抗議をしてやると、彼女はうすら笑いを浮かべながら

「知らない、セキュリティは完璧だ。そんな馬鹿なことが起きるわ

けない」

と、とぼけられて、突き放された。

そのうえ船長席でせせら笑いしながら

「いやなら蹴っ飛ばせばよいだろ？ 問題は自分で解決しなきゃ」と逆ねじをくらった。

ついでに——しらじらしく

「ええっ！ 君の『僕』が気に入らないから船室の暗証番号を……船長である私が猫男に教えたって？ それは関係ないよ。君は何を根拠にそんなことを……。まったくのいいがかりだね」

と、断言された。

ためしに、暗証番号を変えてから『私』を使うようにしたら、夜中の侵入はピタリと止まった。どう見たって船長が怪しい。

そして、今、見栄っ張りなドライブ主任が部屋に閉じこもって、ボイシアナ号の空間転移航法を使えなくなると、また夜にはロックが外れるようになり、寂しがり屋の猫男が私に抱きついてくるようになった。

つまり、ホイヤン船長はそういう女性で、ボイシアナ号が停滞している事情はそういうことだ。

まあいい。とりあえず、朝ごはんだ。

魔界の住人たち

魔界の住人たち

食堂では大男のメイジ機関士兼操縦士がチョコレートドーナツとココアの朝食を取っていた。

胸板の厚さ、腕の力瘤、太い首。偉大な筋肉美の化け物だ。彼が食べるたびに、ドーベルマンのようなたくましいあごが動く。運動が趣味で、プロテインとビタミンと微量栄養素のサプリメントを欠かさない。ついでに、ドーナツに目がない。

個人の食料として買い込んだドーナツをいつも食べている。そのうえ、精神安定剤のコレクターだ。

褐色の肌をした彼は、気軽にあいさつしてくれる。

「やあ、シャーレイ君。おはよう。今朝は早いね」

「おはようございます」

挨拶を返してから、私は自分の食事を準備した。

私は保管庫から、コーンフレークのセットを取り出した。テープで止められているレーズンパックをはずして、フレークの中に入れてまぜる。テーブルのポットから出ている細いチューブをパックに挿しこんで牛乳をそそいだ。

食堂の赤い椅子にすわった。

チューブをくわえて朝飯を口に含むと、……なにか魚臭い……

感じたままに言うと、メイジ機関士が首をふった。

「猫男がまたやったかな？」

「え？」

私は驚いた。

「それじゃ、晩ごはんは……」

そこへ、船長が入ってきた。私たちと同じ青い制服を着ていた。茶色の髪を古典ビデオの姫君のように長く編んで、それを頭にまいていた。腰に拳銃のホルスターを下げていた。

ホイヤン船長は私とメイジ操縦士をちらりと見たあと、保管庫からカボチャサラダのパックを取り出した。

この人は、血の気が多いわりに菜食主義者で小食なのだ。

サラダのパックにお湯を注ぎながら、私に微笑んでくれた。

「雑用係シャーレイ・パパベル君。われらの高速郵便船、愛しきボイシアナ号は、すでに六日も動かないままだ。郵政部への宣誓『私たち郵便配達人は雨の日も雪の日も速やかに職務を執行します』に違反してしまった……」

この人の笑顔は、人も殺せる。

「この責任について、君はどう考える？」

私は魚臭いコーンフ레이크を飲み込んでから、できるだけかしこまって答えてやった。

「万能にして偉大なる船長の全責任である、と私は銀河的規模で考えます。第一、雨や雪は地表から見た視点であって……」

「矮小な君の責任だ！」

ぴしゃりと言いつつ切られて、にらまれた。

「そう、君の責任だよーお」

ドーナツをほお張っていたメイジ操縦士が、横から、低くてよく通る声で、のんびり相槌をうつた。また、まったくする薬を飲んでいないのかも知れない。

「船長は、黒でも白と言いくるめる人だからね。黒いカラスだって船長と五分話し合えば、自分を白いアホウドリだと思い込んでしまうから、絶対に君の責任だね」

ドーナツからはがれたチョコレート破片が、宙に漂いはじめた。空気清浄機のゆっくりとした気流にのって、吸気口に吸いこまれていく。

ホイヤン船長は、反論したメイジ操縦士を横目で見てから、食堂に設置されている肘掛つきの船長席にすわった。

見た目だけなら、小柄な彼女はとても魅力的な女性船長だ。

その気になれば――背の小さいことをのぞいたなら――恋愛ビデオの主役でもこなせるだろう。でも……

猜疑心の強そうな灰色の瞳は相手の弱点を狙ってゆっくりと動く。相手を威嚇するような赤みを帯びた茶色の髪に、嘘と屁理屈を言うのに最適な、つやかで、ふつくらとした唇をしている。

男たちをだますために透きとおるような白い肌をして陰りのない瞳をきらめかせる。女たちをだますために凛々しい額とカールした長い睫毛をもっていた。

でも、胸はない。これが恋愛ビデオに出演できなかった原因ではないかと、私は陰ながら推測している。

そのホイヤン船長が、につこり笑ってから真顔にもどると、操縦士に向かってぶっきらぼうに言う。

「そうだな。では、我が愛しきボイシアナ号の停滞を救うため、機関士兼操縦士たるメイジ・メイワザ君。君がドライブ主任に甘い愛の言葉をささやいて、空間転移を実行してくれたまえ」

「ああ、それは駄目です。俺みたいに、ごつい人には無理な話で……それはすらりと優雅な雑用係り、シャーレイ君の仕事です」

二人の目がいつせいに私を見た。そういうことだ。

雑用係。つまり、私は態の良いドライブ主任のお守り役だ。断じて言おう。ドライブ装置ではなくドライブ主任だ。気まぐれで、わがままで、自分勝手なドライブ主任を、持ち上げて、その気にさせて、やる気にさせるのが私の仕事だ……そのためなら王子様にだって……

「にゃん！」

一声鳴いて、制服に着替えた猫男が入ってきた。みんなを見渡すと、保管庫から、自分用の鯖缶詰を取り出した。惑星の表面から重力に逆らって軌道上に持ち上げられた重量物は——とくに水分たっぷりの缶詰は——宇宙の貴重品だ。

どうやら今朝はご機嫌らしい。

につこり笑うと、私となりすわった。いつもどおりに、すり寄ってくる。

猫男は人肌のぬくもりが大好きなのだ。隙間とチャンスさえあれば、わざとくつついてくる。たとえ夜でも。

『灰色マルハナバチ』号の事故のあと、後遺症で治療施設に入っていたときからの癖だそうだ。一人ぼっち恐怖症と噂されている。ぱかん。

奴はプルパックを引いて缶詰を開けと、塩をかけてフォークで食べはじめた。塩分の取りすぎじゃないかと、言ってやりたくなる。

猫男の本当の名前は、モンゴメリ・アシュトン。

ボイシアナ号の保安主任兼環境主任を務めている。見た目はふうの人間だ。それも、長身で特別にハンサムな男だった。

サイアミーズの血を引いたような深いブルーの瞳。バーミーズのように形の良い鼻。子猫のように可愛い唇に、長毛種のようなプラチナブロンドの髪を波打たせている。体はアビシニアンのようにしなやかで、尻尾はないけれど、女の子の瞳を釘付けにする。

そして、本人は山猫のようにすばやく動き、つかまえた獲物をいたぶるのが大好きだ。

空間転移航行中に前方に現れる空間欠陥を、光子魚雷で縫い合わせるのが仕事だ。転移航行中はリーダーは使えない。目視が頼りだ。そして、奴の青い目と反射神経は船の安全に欠かせない。

ついでに船内の空気と食物の管理、惑星探査も環境主任として彼の任務になっている。

サラダパックを口に含んだホイヤン船長が、しばらくすると女性

らしく、フルートの低音のような声でつぶやいた。

「……なんで、カボチャサラダが、魚臭いんだ？」

「にゃーん！」

猫男がにっこり笑って人間モードになって答えた。

「誤解です。カボチャサラダが魚臭いものではありません。ホイヤン船長殿の過剰な健康志向が野菜たちに臭いをつけているのです。肉、魚を避けようとする無意識がなせる業です。単なる気のせいでしょう。もしかしてら配水ラインにちよつと臭いがついたかも知れませんが、どうぞ召し上がってください」

「……環境主任たるモンゴメリ君。君の推理と論理には感服する。でも、まずい。どうにかしたまえ……配水ライン……おい、毛なし猫！ また、やったのか！」

猫男は獲物をいたぶる表情になった。

「にゃにゃーん？ 船長殿はタラはお嫌いでしたっけ？ 倉庫の原料はぜんぶタラにしておきました。タラのフライこそ栄養とおいしさで究極の食糧。自慢すべき我が郷土料理にして、世界を制覇するグルメのあこがれ」

うすく笑った猫男のモンゴメリは保安主任であり、環境主任でもある。つまり、船内の空気と湿度の管理、そして一番大事な食料の生産とメニューは猫男に任せられている。

猫男は腐りかけの臭いタラのフライが大好物であり、船長は大嫌い。

深宇宙を漂う恐怖と停滞の手持ち無沙汰から、きつと猫男はいつもどおりに、食糧用元素をフードジェネレーターに全量ぶち込んでタラにしてしまったに違いない。猫男におもちゃにされ、船長には嫌われて、かわいそうな元素たち……

猫男は承知のうえでやっている。

恒星間の空虚さは生き物を憂鬱にさせて、発作的な行動を取らせる。それだけだ。予定では二日でベテルギウス中継点に着くはずだった。いまは六日目、ステーションの糧秣合成部で仕入れた冷蔵庫

の中の新鮮な食料は空っぽになっている。フードジェネレーターが作りだす、いかにもインチキな食べ物っぽいもので栄養をとらなければならぬ。

ホイヤン船長は状況を理解すると、船長席から決然と言った。

「メイジ機関主任。ただちに、ジェネレーターと配管を全面的に洗浄しろ。船長の権利として、タラの晩ごはんは絶対に食べないからな」

「そう、俺の仕事。配管を洗って磨く、っとね。でもね、船長。俺は出発前に何度も言ったはず、全面的にオーバーホールして、配管からの漏れも修復する。フードジェネレーターも新しいウェットタイルにして鍵をつけて自動モードにしておけば……」

「金がない」

熱くなつて語りはじめたメイジ機関士の言葉をホイヤン船長が押さえ込んだ。

『愛しきボイシアナ』号は、宇宙艦隊から民間用に払い下げられた三十年まえの最新鋭艦だ。元はデリコーン級データ収集艦だった。でも古い。いまどきの宇宙船でフードジェネレーターがドライで出てくるのも珍しい。そのうえ、あちこち痛んでいる。

船長がこつちを見た。

「雑用係にして郵便主任シャーレイ・パペル君。ただちに魔法使いを誘惑しろ。今すぐ。タラの晩ごはんを食べるくらいなら、私がドライブをいじって空間転移させてやる」

「船長が？」

こんどは、メイジ機関士が眉をつりあげた。

「ドライブが壊れちまう。あれは誰かさんとちがつてデリケートなんです。調整して校正するのにどれだけ手間がかかると思ってるんです」

「にゃーん！」

モンゴメリ猫男も反対のようだ。

言い終わるのをまって、私はかしこまって答えてやった。

「魔法使い様は、このまえの操作の失敗で、ここ数日、羽をもがれた妖精のようにご機嫌麗しくないようで」

ホイヤン船長の目が私を捉えて光った。

「何のために、三百人の希望者から君を選んだ、と思っている？」

魔法使いが君の写真を見て指差したんだぞ。もっと自信と自覚を持つてもらいたい」

そして、邪悪な光を両目にたたえて、つぶけた。

「奴は今、ファンタジーに興味をもっている。お姫様と王子様だ。通信販売で君に買ってやった王子様の格好をしていけば、いちころだ。なんだったら押し倒しても良いぞ。船長権限で許す。結婚式の費用は会社の経費で落としてやるから——」

「いやです！」

私は断った。

あんな、安っぽい白タイツを身に着けて、かぼちゃパンツを穿いて、ふりふりひだひだの上着を着て安っぽい王冠を頭に載せて、魔法使いに頬をひっぱたかれたり、杖で殴られたりされるくらいなら、死んだほうがマシだ。

でも、私の拒絶は三人の冷たいつぶやきに出あった。

「にゃーん？」

「なんだと？」

「ふーむ？」

猫男は弱い獲物を見つけたように鳴いた。

船長は拳銃に手をかけたようだ。

メイジ操縦士はポケットから錠剤を取り出した。赤の錠剤だ。精神安定剤らしい。

みんなの目は、宇宙っぽく液体水素より冷たく光っている。無言の圧力つてのは、これだな。

「……わかりました。やれば良いんでしょ。やりますよ。でも、やるからには、みんなも協力してください。チームワークでいきましょう」

それから、自分のことになると、急に渋りはじめた三人を説得した。

目的地のベテルギウス中継点は五十三光年先にある。ボイシアナ号の速度は秒速8・5キロメートル。このままいけば、百八十七万年後に到着する。私は腕時計の電卓を叩いて計算結果をみんなに見せた。これはかーちゃんに就職祝いに買ってもらったものだ。おもちゃみたいだけれど、意外と役に立つ。

生きている間に着きたいなら、みんなでやりましょう……でも、一人じゃいやです。

——なんで、私なら良くて、自分だといやがるんですか？——そう言っただけだ。

みんな目をそらしていた。

「船を動かします。文句はなしで」

打ち合わせをして役割を決めた。十五分後に集まった。

メイジ操縦士は黒い眼帯をかけて頭を布で包んでいた。海賊だ。

筋肉男には意外なほど似合っている。

猫男のモンゴメリは、化け猫だ。ロープの尻尾をつけている。でも、いまひとつ雰囲気足りない。私は備品庫から持ってきたマジックインキで鼻の頭を黒く塗ってやった。ついでにもってきた鏡で見せてあげた。

「ふにゃん。パ、パパベル君、やりすぎではないかね？」

ついでに両頬に三本のヒゲを太く書いてやると、猫男は抵抗をあきらめたようだ。

ホイヤン船長は、もちろん邪悪な魔女だ。濃い化粧をしてきてもらった。紫色のルージュに青いマスカラを塗りたくっていた。

でも、突き抜けていない。赤のマジックで顔の半分を唇にしてや

る。黒のマジックで顔中に老婆のように皺を描いてやる。

あわてて手に取った鏡に映った自分を見て

「パパベル君。あとで覚えている」

船長らしく、みじかく捨て台詞を吐いた。

みんなの顔を見ていると、恒星間のピエロだ。

「シャーレイ君。君は女の子みたいな名前なのに、可愛くない」

船長がつぶやいて、猫男がうなづいた。

それは無視して、みんなに言っちゃった。

「では、みなさん！ このまま、ドライブ主任の部屋に行って騒いでください。あとから、私が行って、魔法使いを説得しますから」

三人は、そろそろと通路を歩いていった。食堂から手を振って見送ってやる。

それから、私は船室にもどってドアをロックした。

ざまーみる。

郵便が遅れてしまった以上、無理やり主任にされた私の責任になる。どのような理由があっても、遅れたことの言い訳はできない。

手紙は、宇宙で暮らし、空間に航路を開き、惑星を開拓する人たちの士気を維持する最重要な戦略物資なのだ。

超光速通信が理論的に否定された今では、手紙は人間のつぎに重要な物資と規定されている。一刻でも早く、手紙を待つ人に届けるために高速郵便船が宇宙を飛び交っている。

それなのに、ボイシアナ号は、二日で着く予定のベテルギウス中継点に六日たっても着くめどは立っていない。ぼろ船と気まぐれなドライブ主任と船長の責任だ。

断じて私のせいじゃない。

でも、査察官に呼び出されておこられるのは私だ……

でも、船長がなんと言おうと、あの夢見る乙女の魔法使いの相手

をするのはごめんだ。と思っていたら、部屋のインターホンにティ
ブレイ・エス力嬢本人の声が響いた。

「シャーレイ様、パパベル様。助けてください」

あわてて、ドアのロックを解いた。途方にくれたような魔法使い
様が立っていた。

「朝ごはん食べようと出てみたら、みんな、おかしくなっていまし
た」

魔法使いこと、ドライブ主任ティブレイ嬢が、床を蹴って部屋の
空間に入ってくる。宙に舞った。足首までの白くて長いドレスを着
ていた。空中で一回転する。

船内規則に違反して、電磁靴を履いていないようだ。かわりに透
明でガラスのような靴をつま先に光らせていた。青いペティギユア
は場違いな雰囲気をかもし出していた。

「チャンスだ。私は答えた。ここは、その気にさせないと。」

「お任せください、王女様。安全な場所があります。わたくしに付
いてきてください」

背伸びして透明な靴をつかんで、魔法使いを天井近くから引きず
り下ろした。手触りから履いている靴はポリカーボネートのような
また、得意の通信販売で無駄遣いして、すぐ飽きるものを買ったよ
うだ。

彼女の名はティブレイ・エス力。

小柄で黒い瞳と三つ編みの長い髪をした謎の女。気まぐれな空間
転移ドライブの主任技師で計器の反応からドライブを操る黄金の指
を持つている。そして、この役職は多くの恒星間宇宙船で変わり者
の多さでも知られていた。彼女もその例に漏れない、と言うか典型
的というか、ひどいほうと言うか、極端というか宇宙一の見本とい
うか、つまり、かなり重症で精密部品並みにていねいに扱う必要が
ある。

「王女さまじゃなくて、バターカップって呼んで」

なるほど、夜遅くまでビデオを見ていて、今度はキンポウゲです

か……

ドライブ主任ティプレイ嬢はマイクロビデオキューブに、すぐ影響される。

このあいだまでは古代のファンタジーを見て、自分を城に閉じ込められたお姫様と信じ込んでいた。少し前は、孤児に生まれて街角でマツチを売っていた。メイジ操縦士の話では、そのまえのまえは子猫だったそうだが、病み上がりの猫男と喧嘩してからは、七人の小人を連れて森の中で眠っていたら野獣にキスされる美女になっていたとも聞いた。

私は魔法使いの手を握るとブリッジに向かった。無重力の船内では、重さはほとんど感じない。ティプレイ主任は幽霊のように軽く、手を引かれるままに冷たい手をした妖精みたいに宙を飛んでいた。

ブリッジ

ブリッジ

魔法使いを部屋から追いだすことに成功したみんなは、そろそろと通路を歩いてきた。

海賊と化け猫と魔女と魔法使い、そして私。

全員が、ボイシアナ号を操船する中枢部、船の先にあるブリッジに集まった。

ここだけは宇宙船っぽくなっている。

馬蹄型のコンソールの中央部に操縦士の筋肉質メイジが陣取った。その右には、ドライブ主任のタイプレイ魔法使い。左には保安主任のモンゴメリ猫男。その横に、空間転移中はスキャナーになるホイヤン船長がすわっている。うしろの船長席は空いたままだ。みんなシートベルトをつけて、針路変更の加速度と空間転移に備えた。

ホイヤン船長が正面の大型ディスプレイに、前方の宇宙を映し出した。

漆黒を背景にして、星が満ちている。いつものとおり、ぞつとしない風景だ。

私は、魔法使いのとなりで機関助手になる。別に全自動にして計算機任せにしてもかまわないのだが、資格の関係もあって今は手動になっている。

「出力九十パーセント」

機関士を兼ねている海賊野郎が命令した。それからあわてて、片目を覆っていた黒い眼帯を取った。

私はコンソールのスライダーを動かして、核融合炉の出力を上げた。

「ウェストリーさんには会えました？」

魔法使いティプレイ主任の気をそらさないように声をかける。

「うん」

この人も、ふだんはいいかげんな性格だけれど、コンソールを前にすると人が変わる。そっけなく答えられて、話がとぎれた。

その間に、燃料タンクに積んでいる水素が核融合反応でヘリウムに変わり、その熱をもとにして電磁流体発電機が大量の電力を生み出す。冷却ポンプのうなりが、かすかにブリッジにも響いてきた。電力は船体の八割を占める積層蓄電器にたまっていく。

数字とグラフがゆっくりと上がっていく。

「充填率八十パーセント。転移可能です」

私は操縦士に報告した。

「船体速度8.5キロ」

メイジ操縦士が、読み上げた。もちろん秒速だ。そして、推定速度でもある。船の速度が遅すぎて、深宇宙では速度の測定手段が限られている。

ドライブ主任の魔法使いがつぶやいた。

「任せて、まかせて、まかせて、来てる！」

コンソールのまえで、左手はトラックボール、右手はスティックを握っている。ディスプレイには大小四重の円がくると踊っていた。楕円になったり、直線になったりしている。ドライブ主任は計器に目を走らせながら、四つの円の動きを止めて、中心をまとめしていく。

ボイシアナ号の船体先端に装着された空間解析機がドライブ主任に手ごたえを伝える。

指と数値と手ごたえで、頭の中に二十三次元空間を描いて、その弱点を突いていく。ドライブ主任が魔法使いと呼ばれるゆえんだ。

ドライブ主任の細い指がボールを激しくあやつり、分解能を上げていった。四つの円が震える。

「最大解像度。いきそう……いくわ、いくわ、いくのよ」

「了解」

ディスプレイ主任の泣き出しそうな声に、メイジ操縦士はスイッチカバーを跳ね上げた。

空間転移器の準備完了。

「いっちゃう！」

ドライブ主任の声で、起動スイッチが押された。

貯まっていた電力は一気に空間解析機に送り込まれる。ピコスペー
ーSβ型空間解析機は転移機に機能を変えた。

りゅいん！

体が引きつるような感覚が襲ってきた。二十三次元から十七次元への空間転移が行われた。中央表示画面に外部が大きく写した出される。十七次元の星どもが偽りの光で偉そうに輝いていた。

「にやにゃん！」

猫男の声と指で光子魚雷が、空間欠陥に向けてつづけざまに二本発射された。

正面の大型ディスプレイに発射された二つの光点が動いている。その先の左手の奥は、ゆるぎない闇。空間欠陥だ。ボイシアナ号がここに飲まれたら、どこに行くか、まったくわからない。

空間欠陥から帰ってきた船は、まだいない。

発電機は、空間復元にそなえて電荷を充填していく。私の目の前のディスプレイにその様子がグラフで示された。まだ二十パーセント。

私は正面の大型ディスプレイに目を走らせた。光子魚雷の爆発で画面が白くなっていた。空虚な空間欠陥が光と酸化マグネシウムの粒子で満たされた。しばらく、無力化されるだろう。猫男が得意そうに鳴いた。ひげがおどっている。

「にゃーんーん！」

スキャン中の船長が猫男に声をかけて、念をおした。

「やったか！ちゃんとビデオに記録しておけ。金になる」

空間転移航法中に危険を及ぼす空間欠陥をつぶすと、艦隊航路部から奨励金がでる。ボイシアナ号みたいな弱小郵便船には貴重な資

金源だ。

充填率四十パーセント。

ホイヤン船長は、ディスプレイとにらめっこで恒星のスクランを続けていた。十七次元の星のなかから、本物の二十三次元の輝きを選び分けていった。

「第一ポイント確定」

すぐ

「第二ポイント確定」

でも、第三がなかなか決まらない。船長のまえのディスプレイは、記号と数字が下から上に流れていた。

空間転移航法は——簡単に言えば——三次元の空間を二次元に縮退して、ふたたび三次元に還元する航法だ。たとえるなら、地球を透明なボールとしたあと、北極の上から見て、そのまま上から押しつぶす。北極と南極は重なり合う。北極のシロクマが寝返りを打ったところで空間を還元すれば南極でシロクマとペンギンがいつしよに遊べるというわけだ。

ほんとうは二十三次元なので、弱い力とかファイバー束とか、ゲージ幾何学とかいろいろあるのだけれど、簡単に言えば、そういうことだ。

空間を還元するには三つの星のデータが必要になる。絶対座標にもとづいて、船の進行軸を決定する。

目の前にある光点は十七次元のうそつき星。もしかしたら銀河系から十億光年離れた場所の系外銀河に含まれる星かも知れない。北極の氷と南極の雪が交じり合ったような状態なのだ。

ホイヤン船長のスクランが、恒星の明かりに次々と照準を合わせていく。

恒星のスペクトル型だけがたよりだ。無数の星の輝きを選び分けていく。

発電機は順調だ。

「充填率八十パーセント。復元可能です」

私は報告した。

ホイヤン船長はスキャン領域を変えたようだ。これは勘と経験だけがたよりだ。

そして、口惜しいことに、ホイヤン船長は若い名スキャナーとして知られていた。宇宙艦隊の第一線恒星間輸送艦のスキャナー長でも務められる……はずなのだが、いろいろあつて……今は古びたボイシアナ号の船長になって郵便を運んでいる。

画面が止まった。

「第三ポイント確定」

「了解」

船長の声にメイジ操縦士が応えた。船の仮位置が決まった。

空間の復元だ。

「やるわよ。やる！ やつちゃうから、誤差ゼロよ、見ていなさい」
ドライブ主任が空間解析機の四重の円を整えた。

操縦士はスキャナーのデータから進行方向を決めた。方位角、速度、復元のタイミング、すべてが操縦士の指示にしたがつて船の準備を整えた。

液体酸素と液体水素の炎が噴かされた。ボイシアナ号が描く円運動の加速度が襲ってきた。船の進行軸が計算機と合致した。スラスタが噴射されて、回転モーメントが打ち消された。

船体に埋め込まれているセンサーは、等速直線運動をしめしはじめた。

「十秒前……九、八、七……」

あとはピコスペースβ型空間解析機に電力を流し込んで、宇宙を巨大なニュートリノと仮定したヒッグス粒子の間隙を突けば元の空間に戻る。

突然、私のまえのディスプレイに赤い文字が浮かんた。緊急事態が発生した。

アラートは積層蓄電器の異常をしめしていた。過熱だ。ぼろ船の悲しさ。

「区画Dに異常、充填率七十一パーセント」

「迂回しろ」

メイジ機関士の命令で、私は予備回路に切り替え、異常ユニットを切り離した。

「……四、三、二……」

計算機は非情に時を告げる。電力の充填は間に合わない。

復元の過程を一からやり直すか、電力不足でも実行するか？ 安全を取るなら、工程をキャンセルして……

「行くぞ」

ホイヤン船長はスキャナー席の上で一瞬で、決断した。

充填率七十四パーセントで空間の復元が行われた。大量の電力が注ぎこまれて船内の照明が暗くなった。非常灯の赤い光がついた。

「やつちまつたかな？」

メイジ機関士がうめいた。積層蓄電器の過放電は致命的だ。ヘタをすれば、全品交換になる。

しばらくすると、頭をすくめたように電力不足の嵐をやりすごしていた計算機が復活した。私はただちに点検プログラムを走らせた。「異常なしです」

報告した。

機関士と船長は、ほっとしたようだ。

とりあえず、成功。

もとの二十三次元、現実の世界に戻ってきた。

自動受信のラジオビーコンがいつせいに飛び込んできた。

「たらったったーようこそ、ベテルギウス中継点へ、がんばったね、歓迎しちゃうよ、こちらは宇宙に花咲く陽気なブラボーポイント、あと一息さ、ベテルギウスは爆発寸前のご機嫌斜め。でもおしゃべりなおいらは待ってるぜ。二番ステーションで会おうぜい」

「るんちゃっちゃー、るんちゃっちゃー、あたいはベテルギウス中継点、誘惑する妹たちのオスカーポイントよん、お兄ちゃんたちもおねえちゃんたちも、絶対よっていつてねええん、サービス満点の第三ステーションを忘れないでねえん」

「柔らかなそよ風と光あふれる宇宙のオアシス、虚空に浮かぶ緑のやすらぎ。ベテルギウス中継点へようこそ。こちらは憩いのフォックストロットポイント、お疲れ様でした、あと少しです、さわやかな柑橘系のかほりがあなたを誘う第一ステーションをぜひ訪れてください」

ホイヤン船長が手元のダイヤルを調整した。ビーコンに含まれる計時情報と照らし合わせているようだ。ボイシアナ号の正確な位置が算出された。

「やった！ 誤差わずかに二十五万四千百二キロ。八時間ちよつとだ。晩飯に間に合う。絶対にタラのフライは食べないからな」

「ああ、ごめんなさい、ごめんなさい。ぜんぶ私のせいです」

ホイヤン船長の歓声に魔法使いの泣き声がつづいた。

魔法使いティプレイ主任はシートベルトをはずすと、床を蹴って天井まで浮かび上がった。一回転して、透明な靴で天井を蹴るとブリッジのドアを開けて、通路に出て行ってしまった。

「船長……」

「にゃん」

海賊と化け猫が、椅子にすわったまま船長を見つめた。

「なんだ、貴様ら、その目は！ ちょっと口がすべって誤差を言っただけ……」

「にゃーん！ ドライブ主任が誤差を気にしているのは、あなたもご存知でしょう？ なんて言っちゃうのかなあ？」

猫男が非難がましく、片手の人差し指を立てて、横にふっていた。

ふつうは、一回の空間転移航法で誤差百万キロメートル以内に収

めれば、腕の良いドライブ主任といわれている。まえの五十光年をこなしたとき、空間転移の誤差は百四万キロメートルだった。

正確さ、から見れば、ティプレイ嬢はとても優秀なドライブ主任だ。不安定なことをのぞけば。

前回の空間転移航法で、わずか四万キロをはずしただけで、ティプレイ魔法使いは気に病んで部屋に閉じこもってしまった。おかげで、ボイシアナ号は宇宙空間で立ち往生するはめになった。宇宙の広大な暗闇では、ささいなことでも気になって、人は簡単に鬱状態になる。

形勢不利をさとした船長は、急に私のほうに同意を求めてきた。

「シャーレイ君。君はどう思う。ティプレイは完璧主義者だからな。単なる気にしすぎだ、と思うよな？ そうだろう」

めずらしく、きまづい雰囲気を感じとったようだ。

「ドライブ主任は」

私は、いったん切つて、船長を焦らしてやった。

「規則どおり電磁靴を履くべきだと思います」

答えをはぐらかしてやったら、灰色の瞳ににらまれた。

「だいたい君は、なんでシャーレイなんて、女の子の名前をしているんだ？」

また、いつもの話題をふってきたので、適当にかわしてやろうと思っていたとき、船長席の赤ランプが点いた。

緊急通信のランプだ。

「おい。聞こえるか？ 『愛しきボイシアナ』 応答せよ」

邪悪な魔女はシートを移つて、船長席にすわった。肘掛の部分を操作して、正面の大型ディスプレイに相手を映した。画面には、濃紺のネイビースーツを着て、灰青色のネクタイを締めた男がしゃべっていた。襟の階級章は二つ星の中佐だ。宇宙艦隊航路部のお偉いさんのようだ。

男の表情が固まった。

「こちらは『愛しきボイシアナ』の船長、ホイヤン・パセルだ。何か用か？」

しばらくの沈黙の後、やっと中佐が応えた。

「生きてたのか……」

「よいなお世話だ」

齒切れの良い船長の返事。

「いや、すまなつた。謝罪する。私は艦隊航路部長ダビーだ。君たちのあとからに出航した『ゆるやか伝書鳩』と『あつたか極楽鳥』が、まだ着いていない。緊急に航路の点検に向かった『るり色はちどり』とも連絡が取れない。航路状況について何か情報を持っていないか？」

灰色の髪の方は早口で問いかけてきた。

「……すまない。何もない」

「にやん！」

化け猫が強く鳴いた。船長はつづけた。

「そういえば、転移の直後に、でかい空間欠陥があった。光子魚雷二本で塞いでおいた。奨励金をよろしく」

「……そうか、ありがとう……ホイヤン船長、中継点に着いたら、ぜひ航路部に寄ってくれ」

返事も待たないで、男は通信を切った。

安定していた航路で三隻がロストか。だいぶ慌しいようだ。

操縦席でやり取りを聞いていたメイジ操縦士が暗い表情で船長につぶやいた。

「『ゆるやか伝書鳩』って、セレッシャル・エンベロープの高速輸送船でしょう。十六核融合炉、四十センチクラスの百二十八スキャナー船ですよ。『るり色はちどり』は複眼自動スキャナーに六十四光子魚雷搭載艦ですぜ。『あつたか極楽鳥』といえばプリン船長だし……みんな、やられたのか……」

そういうとポケットに手を伸ばした。また薬の時間のようなのだ。

ボイシアナ号は三核融合炉、十センチクラスの六スキャナー十二光子魚雷船だ。三世代まえだが、艦隊所属艦の特徴で船の大きさの割りに光子魚雷を多く持っている。

空間欠陥に飲み込まれなかったのは、幸運に恵まれていたというか、魔法使いの気まぐれで助かったのか、と思っていたら

また通信がもどってきた。

航路部長が映った。

「それと、ホイヤン船長……船を降りるまえに、その、つまり……」
「なんだ？」

「顔を洗っておいたほうが良い、と、思うよ。私の心からの忠告だ。以上」

また、さつくりと切れた。

私の背中に目は付いていないけれど、船長が私を見つめているのがわかった。

機関をチェックするフリを試みたけれど、背後の殺気は消えない。

あきらめて、振り返ってみると顔の半分がマジックで赤くなっている魔女が、とても落ちついた声でしゃべった。

やっぱり、この人、本気になっている。

「航路部長に、この顔を見られてしまった。シャーレイ・パパベル君。私に恥をかかせてくれたな。機会があったら、射撃の的をやってくれないか？」

「だいじょうぶですよ」

私はなだめた。

「どうせ、みんなおかしいんだから、だいじょうぶですよ。すぐ忘れちゃいますよ」

「忘れなかったら？」

「だいじょうぶです。私が責任をとります」

言ってから、しまった、と思った。ホイヤン船長は冷たく微笑ん

だ。

メイジ操縦士は針路を決めると、減速にとりかかった。私は食堂からドーナツとココアを持ってきてあげた。

もしかすると、怒った船長が本当に……私に遊泳服を着せて、耐貫通性のテストをやらされるかも……そうなったとき、止めてくれそんな操縦士は仲間にしておかないと。

なぜなら、ホイヤン船長は、いつでも、趣味は拳銃射撃、と公言しているからだ。

お嬢様が通うことで有名なパロディア陸軍女子学校にいたときから、腕をきたえていたらしい。あそこは全寮制の女性士官学校だ。もともとは、殉職した兵士や警官の子供のために設立されたのだけれど、定員に足りないときは、高い寄付金を払えるお金持ちの女の子も入学できる。

規則が厳しいので、親たちは安心するらしい。

礼儀作法と一般教養、そして射撃は必須科目。成績優良な生徒には、拳銃射撃が許される。船長は、それが自慢らしい。

深宇宙の航路帯で、暇なときは遊泳服を着こんで外に出て、プラスチック球体の標的を射って遊んでいる。

「無重力の弾道にもなれたよ。でも音がしないのは、つまらないな」と帰ってくると言っていた。

厳密には、この行為は航行規則六十四条——廃棄物の宇宙空間への投棄はするべからず——に違反している。

私がいちど注意したら、

「男のくせに、細かいなあ」

と反論された。

ティプレイ主任は

「ホイヤンは昔から射撃だけは得意なのよね」と笑う。

二人は同じパロディア陸軍女子学校の出身で同級生だ。いろいろおもしろい話がありそうなのだが、二人とも同盟を組んで、私たちが男には秘密を守っていた

ただ、ホイヤン船長は、学校中の先輩たちからラブレターをもらっていた、という噂を中継点の整備ヤードで、私も聞いたことがある。

ベテルギウス中継点

ベテルギウス中継点

宇宙は広すぎる。気が狂いそうになるほど。……というか……気が狂う……はつきり言えば……抑鬱症状と、孤独と空虚感からくるひきこもり。

人は宇宙の暗闇の空虚さに耐えられない。

多くの星がそれに輪をかける。

背景は真っ黒。まさに漆黒だ。そのなかで星たちは瞬きもしないで、手の届かないところで光っている。深宇宙から見る星は、人間の感情も拒む冷たい光なのだ。これが一番、精神に悪い。環境倫理学の定説になっている。

たいていの恒星間宇宙船は、秒速8.5キロメートルで進んでいく。時速三〇六〇〇キロメートル。この速度だと、一光年進むのに三万五千二百九十一年かかる。

通常の航法では、乗組員は——乗客がいればその人たちも——星々のあいだで止まっている感覚に襲われる。深宇宙の暗闇で、船は動いているのだが、その広さからは永遠に目的地に着かないように思われる。

ため息がでるような停滞感は、乗員と乗客に次々と伝染していき、船の雰囲気は陽気とはかけ離れたものになる。八割の乗組員は精神安定剤を服用して、職務をこなしていく。

もし、転移航法に失敗すれば、0.5光年さきに目的地は見えているのにたどり着けない。

地表にいたりとき、人格は地球の大きさをもっているけれど、飛びつづけるあいだに宇宙船の大きさになり、やがては個人用船室の大きさになる。つまり、部屋に閉じこもってしまう。

統合宇宙艦隊の士官任期は三年だけれど、再契約に応じる者は六割を切る、と噂されている。地球の濃い空気と暖かい陽の光にホームシックを覚えてしまうから。一度地表に降りると、二度と深宇宙の空虚さに挑もうとしない。

でも、変わり者はどこにでもいる。艦隊公報がときどき発表する統計を信用すれば、百人あたりにつき、四人が宇宙に憑かれて時代を支える裏方たちになっていく。

多少頭がおかしくて、性格が歪んでいても、飛び続けることができるのはステーションの整備員たちのあいだでは「才能」とされていた。

たとえば……ホイヤン船長とか、猫男とか、ティプレイ魔法使いとか、メイジ操縦士とか……

液体水素／酸素ロケットの長い減速がはじまった。そのすきに、船長と猫男は顔を洗って、すっきりとしてきた。

「君のおかげで、顔が荒れちゃったよ。……この恨みは忘れないかな」

ふつつにもどった魔女から文句を言われた。

そのあと、ベテルギウス中継点の管制官の指示で、ボイシアナ号は第三ステーション、四番デッキに誘導された。メイジ操縦士はスラスターを噴射させ、少しずつドッキングポートへボイシアナ号を導いていく。

飴玉の代わりに、口の中で精神安定剤を舐めているようだった。

接続は、やり直しなしの一発で決まった。

ドッキングしたあとは、ステーションの回転を借りて、船内にも重力が戻ってきた。

荷揚げをはじめると、すぐに郵便査察官がボイシアナ号にやってきた。

六日間の遅れは致命的に、査察官の目に留まったようだ。私はホ

イヤン船長の公務室で、船長とならんで査察官と会った。

コードウェイナー郵便査察官は、とても紳士的だった。灰色のスーツを着こなして、薄い髪にはいていねいに櫛目が通っていた。血色の良い顔をしていて、とても上品なしぐさで名刺を渡してくれた。

「六日間の遅延ですね……」

来客用の椅子で黒縁の老眼鏡をかけて航海日誌を読みながら、しずかに話す。

郵便が予定通り着いていて、イヤン船長が同席していなければ、きっとこの人と仲良くなれたと思う。しゃべり方もふつうだし、宇宙に憑かれていないようだった。

「正確には五日と二十三時間です」

雑用係であつても郵便主任の私は答えた。手紙に関しては、私に責任がある。

「たった六日ですよ」

となりでイヤン船長が、悪びれた風もなく言い放った。

「混乱した航路で、六日以上も遅れないですんだのは、卓越した性能のボイシアナ号と優秀な全乗組員の努力によるものです。そのところを査察官殿も充分考慮にいられたきたい」

郵便査察官は黙ったまま、航海日誌のページを繰っていく。一ヶ所、目を留めたようだ。

「航路の攪乱は、貴船の出発のあとでは？」

「えっ？ ……いや、ええと？ ぜ、前兆現象がありました。その後の様子はどうです？」

うそがばれそうになって、あわてた船長は話題を変えた。

「いま艦隊が航路開削艦の手配をしています。……ここのティプレイ・ドライブ主任に重大な異常が発生した、というのは？」

査察官は航海日誌を指差した。

「個人的な問題ですので、意見は控えます」

「イヤン船長殿」

コードウェイネル郵便査察官は、航海日誌を閉じてテーブルに置いた。ステーションの回転のおかげで、日誌は机の上で止まった。
「ボイシアナ号は、この一年間でたびたび遅配を犯しています。もう一度やると免許を取り消さなければならぬ」

「ご心配なく。次は予定通りにいきます」

ホイヤン船長は、嘘と屁理屈を言うのに最適な唇で答えた。郵便査察官は、机のすみに目を落としていた。

「口ではなく、実績で示してください。多くの人が待っているのです。郵便の遅れは許されません」

「遅れるのも、手紙の楽しみのひとつだと愚考いたします」

目をもどした査察官は眉をひそめてから、ゆっくりとつづけた。

「ボイシアナ号で、リゲル星域に行ってもらえませんか？ そうしてもらえるなら、今回の遅延には目をつぶります」

私はホイヤン船長と顔を見合わせた。これは取引だ。あるいは、郵便免許取り消しを人質にした脅しだ。

船長もあとへ引かなかった。

「あそこは、ど田舎じゃないですか。燃料代も出ない」
顔を上げた査察官が、うなづいて、はつきりと言った。

「ですから、艦隊郵便局のチャーター船として、行っていただきます。受けてもらえるのなら、今回の遅れも、航路の攪乱による不可抗力と言っことで、私のほうから上に報告書を出します」

査察官は微笑んだ。

船長は体を前に乗り出していた。

やる気になっている。でも、リゲル星域は、航路ビーコンの数も少なく、空間欠陥が荒れ狂う難所としても知られている。

それなのに、ホイオン船長は獲物をまえにした肉食獣みたいに大きな目を輝かせていた。

「輸送料金の決済方法は？」

めがねをはずした査察官は、ハンカチでレンズのほこりをぬぐいながら聞いてきた。

「何をお望みはありますか？」

「前払いの即時決済。十パーセントの割り増し料金」

「……わかりました。手配します」

意外なことに、査察官はあっさりとは承して、ホイヤン船長と握手を交わした。そばで聞いていた私の中で疑問がわきあがった。コードウェイネル郵便査察官が船を降りるのを見送ったあと、私は船長にたずねた。

「話がうま過ぎませんか？」

そうしたら、ひじでつつかれた。

「シャーレイ君。人助けだよ、人助け。辺境にも手紙を届ける——これこそ、手紙を運ぶ郵便船に乗り組んだ我々の使命だよ。……それに、貸しは作れるときに作っておかないとな」

小柄なホイヤン船長は、頭の上で指を組んで背伸びしてから、軽口をたたいた。

「でも、やっぱりさ、割り増し率は二十にしても良かったな？ いっそのこと二十五くらい吹っかけてから十七か十八でまとめておけば……君もそう考えただろ？」

口を開かなければ、ほんとうに良い人だと思う。

メイジ筋肉質とモンゴメリ猫男は、荷揚げ業務が一段落つくと、船を降りて遊びに出かけていった。ティプレイ乙女は古いふんわりスカートと舞踏会用の仮面をつけて着飾って出かけていった。おそらく、ビデオショップめぐりだろう。

ベテルギウス中継点第三ステーションの施設は大部分が民間用に開放されている。艦隊が管理する第一よりもけばけばしく飾られていた。いろいろな娯楽設備もある。深宇宙を飛び交う人たちの憩いの場であり、情報交換のホットスポットで、無重力で弛んだ骨を引き締める重力場でもある。

ホイヤン魔女も、オレンジジュースとアルファルファサラダと卵コーンスープを求めて、ついでに艦隊司令部と連絡するために降りていった。

私は明日に備えて早く寝た。断じて、船長に飼い慣らされたわけではない。

責任があるからだ。

荷役作業の大部分は雑用係りの仕事になる。明日から配送所とか、手紙のデータ復元キー受け渡しとか、いろいろ飛びまわらなければならない。

一日後。

ホイヤン船長が、第一ステーションから帰ってきたときには、ボイシアナ号は問題まみれになっていた。

メイジ機関士は整備ヤードに入り浸って、かつてに装備を注文していた。

ボイシアナ号の魚雷ランチャーの周りで、整備ヤードの作業用ポッドが飛びまわっていた。

「船長。いいですよ、このアダプター。俺は一目見たときにピピッときましたね」

メイジ操縦士がココナツをまぶしたホワイトチョコドーナツをかじりながら力をいれて得意げに言った。

「光子魚雷二十四本……」

さすがのホイヤン船長も口ごもっていた。

こういう装備ならマニュアルなしで説明できるメイジ操縦士によれば、ランチャーにアダプターを取り付けることで、二倍の魚雷を搭載できるようになるとのことだった。

たしかに、心強い武器だけど……私も横から口をだした。

「メイジ機関士、あの、新式のフードジェネレーターを買ったほうが良かったんじゃないかと思えますけど……それとアイスクリーム製造器も」

もともとボイシアナ号は魚雷を多くつんでいる。光子魚雷二十四本となれば、ちょっとした航路開削艦に匹敵する。単艦で航路に散らばる空間欠陥をつぶして、航路帯を切り開く作業艦だ。

でも

「バカを言うな。食い物がなくても飛べるけど魚雷がなくちゃ、転移空間で困るだろ？」

と反論されてしまった。なにより、もう発注ずみでキャンセルもできない。

改造工事は半日で終わった。作業員のリーダーがブリッジに来て、制御ソフトを書き換えた。帰りがけに請求書を持ってきたので、私が受けとって船長に見せたら顔を引きつらせていた。

そのいっぽうで、ティプレイ魔法使いは、お金も持たないでビデオ店に行つてデータを大量に買い込んでいた。棚一つ分をそっくり買つて支払いができないので揉めていた。

「ボイシアナ号のティプレイです。お金が無いくらいで文句があるなら、ホイヤン船長に言いなさい」

店員に食つて掛かつていたという。私が出かけていって、代金を立て替えて開放された。

そして、モンゴメリ猫男は女に刺されて、警察から事情聴取中だった。こちらは船長が引き取りにいった。連絡が入って心配していたのに、船へ帰ってきたところで猫男の顔を見るとぴんぴんしていた。

私は声をかけた。

「猫男、だいじょうぶ？」

「うん。後ろからナイフで刺しに来たのだが、背中にくくりときたとき、すぐ体をひねってよけた。あの子も吾輩の敏捷さについてこれなかったようだね。うん。かすり傷だよ。へーき。うるさいんで捨てた女の子に恨みを持たれたようだね。うん。気にするほどのこ

とじゃないよ」

良く見ると作業服の左横腹が切れていた。ステーションの係官は「もめごと」ということで処理してくれた。

ホイヤン船長の厳しい声がつづいた。

「モンゴメリ・アシントン君。船内規則により船長に与えられた権限を行使する。二日間の外出禁止だ」

「にゃん」

ついでに、ホイヤン船長を激怒させる事態が起きた。

行方不明になっていた郵便船『あつたか極楽鳥』が大幅に遅れてベテルギウス中継点に着いた。

みんな喜びの声をあげて迎えたのだが、艦隊チャーター船の仕事をとられてしまった。

仕事を横取りした『あつたか極楽鳥』のプリン船長から連絡があった。

ホイヤン船長とも知り合いだ。

「プリン殿、生きてたか……」

「よけいなお世話だ」

歯切れの良いプリン船長の返事がスピーカーから聞こえた。スクリーンに映った彼は、つるつる禿頭で、顔には深い皺が刻まれている。銀河系オリオン腕からペルセウス腕への探検にも参加して、十六のときから飛びつづけている数少ない古強者の一人、グレート・キャプテンだ。

「コードウェイネル郵便査察官と艦隊事務所から連絡があつた。艦隊郵便局のチャーター船は、こちらで受けた。君のボイシアナ号は後ろから飛んで来い。リゲル三十一で指揮権の受け渡しになる」

そして、小ばかにしたように笑ってつづけた。

「遅れるなよ」

ぷつり。

ホイヤン船長の返事をまたずに、通信が切られた。それがホイヤ

ン船長の怒りを煽ったようだ。

「あいつら……これだから、男って信用できないんだっ！」

「ぶにゃん！」

聞いていた猫男もうなづいた。

「でも、女性はおつと信用できないんじゃない？」

私の意見はみんなに無視された。

メイジ操縦士の悪魔のささやきが聞こえた。

「やっちゃいましょう。個体ロケットブースターを装備すれば、通常航法で秒速12キロ出せます。やつらの鼻を明かして……いつそのこと、イオンエンジンとゼノン発生器で……」

使い捨ての個体ロケットブースターは、軌道上ではとても高価だ。でも、威力は抜群だ。転移航法は50光年を一瞬で移動するが、ステーションへのアプローチの加減速には時間がかかる。それを縮められれば……

さすがに船長はひるんだ。

「個体ロケットは、少しやりすぎだ。明日から査察官に交渉してみる。シャーレイ君、荷役の方を頼んだ」

浮かない顔で行ったが、半日後にもどってきたときは平常だった。

「いちおう、『あつたか極楽鳥』と『愛しきボイシアナ』二隻ともチャーター船になって、貯まっていた資材と郵便を運ぶ。『あつたか極楽鳥』の指揮権はリゲル三十一まで、あとは我々が引き継ぐ」

「まあ、上のほうから見ればしょうがないですよ」

私は船長を慰めてやった。

確実に手紙を届けるには、艦隊郵便局が確かなのだが、役所仕事で規則と書式にうるさくて、雑貨は引き受けてもらえない。早く届けたい人や荷物を送りたい人は、運賃が高くても民間郵便に頼る。

電波は遅すぎて使えない。

手紙が宇宙をかけめぐる。

——二百光年離れた母は、息子に無事をたずねる手紙を書き、息子は百光年先の恋人に愛の封書を送る。恋人は手紙の末尾にルージユを塗った唇の署名。受けとった息子は母に婚約を知らせる。手紙は郵便船にのって宇宙をかけめぐる。運んでいるのは俺たちボロ船とも知らずに——

郵便船の倉庫に書かれた落書きどおりに……

空間転移航法が開発され、人も物資も運ばれているのに、電波通信は光の速度より速くならない。郵袋を積んだ高速郵便船は、ふつうは一日で百光年を駆け抜ける。
ときどきボイシアナ号みたいに躓いたり、空間欠陥に消えてしまふ船もあるけれど。

みんな新しい事業に進出してきた。

最大手は地球資本のセレッシャル・エンベロープ社で、ここは旅客輸送もやっていた。

二番目がプリン船長の『あつたか極楽鳥』を持つ、足長信書配達社で、有能な船長の個人名を使って確実さをアピールしている。

三番目はボイシアナ号がいる『お手紙がんばれ組合』で、ホイヤン船長のような弱小独立系が集まっていた。ネットワークの広さが特徴で、高速、低料金ときめ細かいサービスをうたっていた。おかげで利益は少ない。運賃のつごうで、組合は通信販売に主力を移しはじめていた。

艦隊郵便局は、むかしの重量制限——軌道上に持ち上げるのが一番コストがかかる——から、極軽量紙に書いた手紙しか認めていない。郵便船なら、キューブデータでも紙でも、鉄板の切れ端に書かれた言葉でも、料金さえ払ってくれば、どこへでも届ける。

でも、僻地は赤字になる。艦隊チャーター船になれば、たとえば

書一通でも、定額制の請負になって補助金もらえる。

なかなかおいしい仕事なのだ。

会社の規模と船、そして船長の経歴をみれば、ボイシアナが後回しにされて私たちのプライドは傷つくけれど、まわりから文句はない。

リゲル星域

リゲル星域

燃料タンクに――オールト雲からかき集められた水をステーションで光分解して備蓄されていた――液体水素、液体酸素が積まれて、準備は整った。ボイシアナ号には、鋼材二万トン、精密機器一万トン、雑貨混載コンテナ二万トンが積み込まれた。そして、公用郵便コンテナ七十八、私信郵袋コンテナ百四十八が船体の中央に納められた。

リゲル星域に行く船が滞っていたのだろうか、荷物はたまりまわっていた。ボイシアナ号はほぼ満載状態になった。コードウェイネル郵便査察官が、割り増し料金を払ってでも行かせたくなる理由がわかった。

重要なクレジットと銀行口座を預かる為替郵袋はスーツケースに詰められ、三重のロックをかけられて、船長公室の金庫に置かれた。郵便の復元用データが『愛しきボイシアナ』と『あつたか極楽鳥』で交換された。原本コピーは発信局に残される。

どちらかが、あるいは両方の船が行方不明になっても、手紙の内容だけは復元できるようにするための方法だ。もちろん、手紙の秘密を守りたい人には、コピーをとらずに、それなりのリスクを負ってもらう。

出発。

船内時間午前八時。ボイシアナ号のブリッジには全員が配置に付いた。

第三ステーションのドッキングポートが開放されて、アンビリカ

ルケーブルがはずされた。

三隻の解船がボイシアナ号を曳航し、加速させていく。曳航する液体ロケットエンジンの青い炎がスクリーンに映し出された。

ブリッジの私たちには、気持ち悪くなるほどの加速度がかかった。規定の速度、秒速8.5キロメートルで、牽引ロープが分離された。先頭にいた解船から発光信号が送られてきた。

「くそつたれども安全な後悔を祈ってやるぜ」

ボイシアナ号からも返事が送られる。発光通信は私の担当だ。

「しみつたれども無事な帰還を呪ってやるぜ」

べつに双方とも悪意はない。このやりとりはむかしからの習慣だ。円軌道で遠ざかっていく解を見送りながら、私たちの郵便船はまえに出る。

はるか彼方に第一ステーションを離れた『あつたか極楽鳥』もいるはずだけど、目では確認できない。

深宇宙だ。

「いくわよ。極楽鳥のノロマども見ていなさい」

ドライブ主任ティプレイ嬢はコンソールのまえでささやいた。

りゅいん！

船内時間一〇時に第一回目の空間転移が行われて、五十光年進んだ。艦隊航路部が設置した航路確認ビーコンから計算された誤差は五万キロメートル。かなりの精度だ。

昼食を取って船内時間十四時と十八時に、再び空間転移航法が行われた。

ティプレイ魔法使いが大活躍だった。その気合に押さえられたのか、空間欠陥も姿を現さない。ディスプレイを監視して空間欠陥にそなえ、光子魚雷を撃つ準備をしていた猫男が暇をもてあましていた。

「ふにゃおーん。我が光の雷も退屈の前には無力となりて、日照りのときに摘み取られた野菊のごとく萎れん。ああ、愛しき空間欠陥

よ、その魅惑の姿を現し、我が虎の爪に活躍の機会をあたえたまえ」

モンゴメリ猫男は、飽きやすいのが欠点だ。女の子とつきあっても、ひととおりデートをすると、なぜか捨ててしまう。あちこちのステーションで女性たちから恨みを買っているが、本人は人肌のぬくもりがあれば平気だ。

一日に三回の転移はきつい。緊張の連続になる。みんな疲れている。でも、みんなで食堂に集まったときは、順調な進行に充実感があつた。

ドライブ主任は軽く夕食を済ませると自分の船室に引きこもった。猫男はタラのフライを食べながら、私のそばにすわって擦り寄ってくる。ぬくもりが恋しそうだ。

「にゃん！ パパベル君。どうかね。次の転移では、吾輩の代わりに保安主任代理として光子魚雷を撃ってみるかね？ 経験は大事だよ。そのために今晚……」

「いやです。夜は一人でゆっくりします」
ホイヤン船長が笑っていた。

「モンゴメリ毛なし猫、私のところへ来い。にゃんと鳴かずに、わんわん、と鳴ければ一晩中でもナデナデしてやるぞ」

奴はすまして答えた。

「おことわりします。船長殿のボール拾いは疲れるからいやです。だいたい、吾輩はタラが嫌いな人とはおつきあいできません」

食堂はなごやかな雰囲気だった。

私が船室にもどってシャワーを浴びてからゆっくりしていると、ドライブ主任が来た。

「シャーレイ様、パパベル様。ビデオが壊れました。お助けください」

インターホンごしに泣き声になっていた。ドアをあけると、ベリーダンス用の短い上着に金色ラメのブラをつけている。下はハーレ

ムパンツだ。一瞬、ドキツとしてしまった自分が情けない。

「ああ、その……かつこうは」

「どうかしました？」

胸元の白い肌と対照的に、あどけないような黒い瞳が悲しみ色に沈んでいた。

とりあえず、いつしよに主任の部屋まで行ってみた。相変わらず電磁靴を履いていない。無重力の通路を漂っていく。

ロックを解いて入っていった主任の部屋は華やかだった。壁には、いろいろなお姫様衣装がかかっている。ビデオセットの脇にはきらきら下着の山があった。

私は、もしかしたら誘われているんじゃない、という恐怖に襲われたが、主任には、まったくその雰囲気はなかった……と思う。

「メイジ様をお願いしたら、シャーレイ様に聞けと言われましたので」

買い込んでいたデータを差し込んで再生させてみても、確かに映らない。でも、原因はすぐ分かった。

「あー、これ。規格がちがいますよ」

「えっ！ なにそれ」

魔法使い様は機械に疎い。二十四型の古いセットを使っていた。買ってきたビデオは三十六型の五感強化型だった。

そのことを説明してあげると、魔法使いは珍しく声を強めた。黒い瞳がきらりと光った。

「ベテルギウスにもどったら、あのお店に、みんなで殴りこみにいってください。説明なしに不良品を売りつけるなんて最低です」

「あ、いえ、その、リゲルでも新式の変換機が売っているはずですから、すぐ見られます。……ぼ、暴力は良くないですよ」

「そうね。じゃあ、私は昔の古い奴をみるから、あなた出て行って部屋から追い出された。」

ドライブ主任としての腕がなかったら、この人を殴っていたかもしれない。

翌日。

みんな九時にはブリッジに集まった。私は、……その、少し遅れ気味だったけれど、……けっして遅刻したわけではない。ちよつとみんなよりもあとからブリッジに入っただけだ。

四回目、六十四光年の空間転移航法で、誤差一万キロメートルをたたき出した。

リゲル星域の入り口もリゲルステーションまで三十分だ。

ドライブ主任の繊細で優秀な指を見せつけられた。

メイジ操縦士は、うれしい悲鳴を上げた。

「すごいっ！　いーね、いーね。近すぎて減速が間に合わないってばよー！」

「にゃん！」

星型のドーナツを口に入れて、両手で液体ロケットエンジンを全開させて減速に移った。猫男も喜んでいる。

ティプレイ主任は横顔の中で不安げに瞳を動かすと、本物の悲鳴を上げた。

「ああ、ごめんなさい。ごめんなさい。わたくしのせいですう」
シートベルトをはずして、浮かびあがると自分の部屋に逃げてしまった。

残されたみんなで顔を見合わせた。……こういうときは、誰に責任をなすりつければ良いのか考えているようだった。

気まずい予感がした。

ホイヤン船長が取り繕うように

「やったぜ。この速さは記録物じゃないか。シャーレイ君、調べてくれ」

あまり乗り気ではなさそうに言った。

私はコンソールを操作した。

記録のうちでは、二百四十六光年を三十三時間でこなした。ひさ

しぶりにボイシアナ号は高速郵便船と呼ぶにふさわしい働きをしてくれた。

過去のデータでは、十五年まえに十七時間でとんだ船がいた。艦隊勤務についていたプリン船長が指揮した『青い長元坊』だった。

ホイヤン船長に報告してやると、黙りこんで不機嫌になった。

現実の二十三次元に帰ったボイシアナ号にラジオビーコンがよけいなことをしゃべりかけてきた。

「こちらは清らかなリゲルステーション。秩序と安寧の宇宙、リゲル星域にようこそ、不法物資は持っていませんね。薬物、性的刺激物は持っているなら、あらかじめ申告すること。規則に違反すると鉄槌が下されちゃうぞ。規則と道徳を自由と博愛を大事にね。電波が届いていたら応答せよ」

ボイシアナ号から艦隊チャーター船の識別信号を送ってやると、恐れ入ったビーコンは黙った。でも、割り当てられたのは、十三番デッキ。そこに誘導された。

『あつたか極楽鳥』は十四時間遅れてやってきた。

「なかなかやるな」

復元データの破棄について連絡をとったディスプレイの中でプリン船長がほめてくれた。でも、少し皮肉が混じっているような気もした。

私はこれからのことを考えて、媚を売ることにした。さわやかな青年をアピールしておかないと。

ボイシアナ号みたいな弱小宇宙船じゃ、いつまで仕事があるかわからないし、グレート・キャプテンと知り合いとなれば、試験や転職のとき、あとあと有利に思えた。

「ありがとうございます。極楽鳥さんも、がんばったじゃないですか」

「……まあな。君は……新顔か？」

「はい。シャーレイ・パパベル郵便主任です」

「若いな。士官候補生か？」

「いえ、あの、一般公募でして」

プリン船長は、ふーん、という顔をした。

それから、『あつたか極楽鳥』に遊びに来ないかと、誘ってくれた。貨物と郵袋の荷揚げも終わっていたし、私はよろこんで受けた。

行ってみると、太った——というか、ふくよかな——副長も出てきて大歓迎だった。船内を全部見せてくれた。一世代まへの輸送艦を改造したタイプだけれど、すみずみまで掃除が行き届いていた。とくに十二センチクラスの六十四スキャナーは、透明ドームの中で光り輝いていた。十四人の乗組員で三交代制になっていた。二度目の空間転移のとき、船の位置確定に手間取って遅れたようだ。

『あつたか極楽鳥』はベテルギウス中継ステーションで半年かけて改造されて、128の旅客用船室もある。せまいけれど、小奇麗に整えられていた。

ちょうどひとめぐりしたところで、ティータイムになった。私もいっしょにご馳走になった。

船員ラウンジのテーブルを囲んで、出てきたのはアップルパイとバニラアイスクリームだった。白いお皿の上にのっている。もちろん合成食品だけれど、ボイシアナ号のばさばさしたそれに比べると、段違いのおいしさだった。

なごやかな雰囲気になった。

古強者のプリン・キャプテンも、ホイヤン船長のスキャンの腕をほめていた。

そのまへの遅れのことを聞いたら、地球―ベテルギウス中継点の空間転移航法で、空間欠陥が多かったため、一週間じつと待っていたそう。速さよりも安全を重視した、とも言っていた。

ボイシアナ号のみんなとちがって、とても落ちついた会話だった。

でも、

「おい、副長！」

おしゃべりのあいまに一口食べたプリン船長が鋭く、ささやいた。
「これ、今日のアイスクリームは……合成のバニリンを使ったな。

アイスクリームには天然ものを使えと何度も言っただろ。エッセンスオイルなら値段だって大したことはないし、こんなところで節約の精神をつかってもだな、だいいちフレーバーの良し悪しについて諸君は、ど素人すぎ……」

いままでの優しいおじいさんから、駄々っ子みたいになしゃべりかたになっていた。

「せんちょう」

栗色の髪をした、ふくよかなおばさん——というか、中年の女性——副長がゆつくりとたしなめた。

「お客様のまえですよ。アイスクリームの持論なら、私があとでじつくりとお聞きますから」

グレート・キャプテンを黙らせてしまった。
すげー。

プリン船長は、まだ何か言いたそうに、唇をひきつらせていたけれど、あきらめて何度か細かくうなづいた。

「そ、そうだな」

それから、話題はホイヤン船長のことに移った。

むかし、ダビー航路部長が指揮していたデータ収集艦で、彼女は惑星探査への転属願いを出して拒否されたそうだ。ふてくされて憂鬱になりそうなホイヤン船長を心配して、艦隊司令だったプリン船長が郵便船をすすめた。幸い艦隊郵便局からの融資も受けられて、ボイシアナ号は独立した。

そんな話だった。

なんとなく、ベテルギウス中継点で通信したときの航路部長とホイヤン船長の関係が分かった。

副長が優しく、私に聞いてくれた。

「あなたは、だいじょうぶ？ 空を見て憂鬱になったりしない？」

「ええ、まあ、薬なしで元気です」

「そう。じゃあ、才能がありそうね。よいことだわ」

食堂で御馳走になってから船を離れようとすると、搭乗口での別際にキャプテンが内ポケットから取り出した手紙を渡された。二つ折りにされていたけれど、赤い枠取りの公用郵便の体裁になっている。

「パパベル君。ホイヤン船長殿に届けてくれ」

禿頭を光らせているプリン船長が、さりげなく言った。

でも、怪しい。連絡が必要なら、高強度量子暗号無線でも何でも使えるはずだ。内容はおそらく、極秘事項だろう。発信の痕も残したくない場合に手紙が使われる。私を招待してくれたのも、これが目的のようだった。

私はがっかりした

見送りについてきた副長が

「ボイシアナさんでは旅客の輸送はしないの？」

とたずねてきた。

「えっ？ 聞いていませんけど。いちおう船室はあるみたいです」

私の答えに肩をすくめたプリン船長がつづけた。

「これからは、客船の需要が増えるぞ。物好きな金持ちとか、新婚旅行とか。時代に乗り遅れないようにな」

プリン船長と握手した。意外に柔らかい手だった。副長とも。

手をふってボイシアナ号にもどった。

そして、船内時間の夜。

配送所から帰ってきたホイヤン船長に手紙を渡した。

船長公室の椅子にすわって私の説明を聞いてから、封を切った。私を見下したような口調で言う。

「アイスクリームでお使いか。安いお駄賃だな」

でも、読み始めると途中からまじめな表情になった。読み終わると、プリン船長の手紙を渡された。

めずらしくまじめな表情で促している。

「私が読んでも良いのですか？」

念を押してから、文面に目を走らせていくと、リゲル三十三での戦争の噂が書いてあった。

「これ、まずいんじゃない？」

「そう、危険だな」

ついでに船長靴から取り出した、積荷リストも見せられた。こまごまとした数字を見ていくと、公用郵便コンテナ二十八、私信郵袋コンテナ三百十二、鋼材どっさり……

私信が増えていた。なぜ？

リゲル星域は、もともと厄介な場所だ。ペルセウス腕の開発の噂が立ったとき、それを当て込んで込んで開発された。いまはオリオン腕に沿って、千六百光年先を探索船が活躍している。大通りからそれたわき道、しかも行き止まりの道がリゲル星域だ。

ベテルギウス中継点が、ベテルギウスの超新星爆発の監視ステーションからいつの間にか発達していったのとくらべると、開発を当て込んだリゲルが寂れていったのは皮肉な話だった。

ホイヤン船長は私を見つめて言った。

「でも、危険を覚悟しても行かないとな。ボイシアナ号は郵便船だ。手紙を待っている人がいる。我々は中立を保つ。どんな場合でも」

でも、私が『あつたか極楽鳥』の船室と旅客輸送のことを話したら、現実にもどったようだ。

「なるほど、あいつら、そっちで儲けるつもりか。手紙とか通信販売とか、ちまちま運んでるよりも効率は良いよな……」

腕組みして考えはじめた。

翌日は、さらに八光年を『あつたか極楽鳥』といっしょに飛んでリゲル三十一静止軌道ステーションにたどりついて、指揮権の引渡し——小さな金色の鍵——を譲られた。

積荷を下ろした『あつたか極楽鳥』は、いつもの電文——くそつたれども……を送って帰っていった。指揮権を譲渡された『愛しきボイシアナ』は、ここから先は、ホイヤン船長の判断にすべてがかかってくる。

役人おねーさんとセールスマン

役人おねーさんとセールスマン

翌日、私はボイシアナ号の乗客用船室の掃除にとりかかった。荷物の積み下ろしは終わっていたのだが、人が乗る、というのでその準備が忙しい。

こんな船を選ぶ乗客つてのも物好きな人たちだ。それとも、選んでいられないほど切羽詰っているか、ホイヤン船長にだまされて安い運賃に釣られたのか、どちらかだろう。

ひととおり済ましてから、ブリッジにもどって作業終了の報告をした。

ついでに文句を言ってやる。

「ホイヤン船長、なんか私一人だけが働いているような気がするんですが」

船長席の肘掛をつかんだ魔女に、まじめな顔で返された。

「君の質問の答えは、正しい、だ。まわりを見てごらん。頼れる奴がいないのだ。シャーレイ君、わかっているだろう？ 君には期待しているよ」

つややかな唇で、にっこりと笑う。とても魅力的な笑顔だ。たいていの男だったら、ぜったいだまされるぜ。

これってなんか、うまく乗せられているような気がした。

船長の言葉には猫なで声の響きがまざってきた。

「君は雑用係だからな、船の中の仕事はなんでもこなせないと。あと、君、ちゃんと試験勉強やってる？」

「まだ、二年も先の話でしょう。だいじょうぶです」

「本当か？ どの技能資格を希望する？」

「……環境主任にしようかと」

「ふん」

ホイヤン船長は鼻でわらった。

「環境倫理学は見た目より難しいぞ。惑星気象学とか生命倫理とか進化理論とか、あと、開発と良心との兼ね合いがね……宇宙を開発するべきかどうか……」

船長は、いったん切ってから

「それより、寝坊して試験に遅れないようにな。いまでも、ときどき寝ぼけているだろ」

痛いところを突かれてしまった。艦隊士官の試験を受けるとき、ホテルのモーニングコールを忘れていて、遅刻してしまった。面接のとき、ホイヤン船長に誘導されてしゃべってしまったら、思い切り笑われた。秘密にしていたのに。

くやしい思い出だ。

じつをいうとハイスクールを追い出されたのも、二週間つづけて遅刻して、教頭先生に目をつけられたからだ。こっちの方は、まだ秘密にしている。

メイジ操縦士もモンゴメリ猫男も、船を降りて遊びにいつてしまっていた。ティプレイ主任はいったん帰ってきて、「コンビニエンス・ストアに行ったら、ビデオのアダプターは売っていませんでしたけど」

と苦情を言ってきた。データベースを調べて裏通りの電気店を教えあげたら、また出て行った。

ホイヤン船長はディスプレイを見ながら、三つの個体ロケットブースターの積み込み作業の指示をしていた。ステーションの作業員を使って、細長い筒を船外ラックに固定していく。

ええ、本当にブースターを装備？　と思っていたら、残念ながらボイシアナ号の加減速用ではない。お客さんとして乗ってくるセルスマンのサンプルだった。

作業が片付いたころ、メイジ操縦士はブリッジにもどってきた。

わきに小さなケースを抱えていた。

私と船長のまえでケースを開いた。

中身は薬品詰め合わせだ。

得意げに見せてくれたパッケージを見て私は驚いた。

「これ、まずいですよ」

ケースのなかには、瓶の中に入ったドーパミン賦活剤、コリン阻害剤、青班核刺激剤、緑の葉っぱとモルフィンを含んだ黒い塊に視覚処理強化剤と違法薬物が一通りそろっていた。

秩序と安寧の宇宙、リゲル星域なのに、こんなものが手に入るなんて…… と思っていたら

「ふふん。こういうものはな、表向きでは禁止されてる、こういうところのほうの手に入りやすいんだ。それに、俺は医者からの許可を受けている。船室で個人的に使う限りは違法にならない。残念だが、わけてあげられないね」

「使いすぎは良くないですよ」

形どおりに言っではみたけれど、聞き分けるわけがない。メイジ・メイワザ操縦士は薬物のコレクターなのだ。でも、それで深宇宙に立ち向かえる気力が湧くなら、悪くはない。

どうせ、深宇宙ではみんな頭がおかしくなるのだ。意志で立ち向かうか、薬をつかうのか、脳の神経回路からすれば、たいした違いはない。

「にゃーん」

モンゴメリ猫男は大きな荷物を抱えてもどってきた。

「見てくれたまえ。人肌機能つきの抱き枕だ。カフェの女の子が私のためにプレゼントしてくれた」

包装紙を破って、見せびらかす。個体ロケットブースターに似た形だ。表面には、小間使いの服装をした猫耳少女が描いてあった。

「今どきこんなものが手に入るなんて、吾輩も驚いた。さすがは田

舎だな。これなら刺されることはないからな。安心できる。おお、我が愛しき枕よ。我を安眠に誘い、清らかなる夢の世界にみちびきて希望への目覚めを与えよ、それは、我が慈しみの……」

「いくつめだ？」

デイスプレイを見つめながら、ホイヤン船長がわきから口を出した。

「二十三個めです。シャーレイ君、こんなものに頼らなければならぬなんて、まったく、情けないことだと思わないかね？」

「お断りします。夜は一人で過ごしてください」

船長の問いかけなのに、猫男は私のほうに話題をふってきた。冷たく答えてやると、寂しげに鳴いた。

「んにゃーん」

猫男も『灰色マルハナバチ』の核融合炉の暴走事故で心を病んでいる。でも、いっしょに夜をすごすのはごめんだ。

ティプレイ主任も帰ってきた。ブリッジに全員が集まったところで、ホイヤン船長が予定航路の説明をはじめた。

ブリーフィングだ。

デイスプレイに星図を映し出した船長が説明した。

「まず、リゲル三十六へ行く。それからリゲル三十三だ」

魔法使いは、手にしていたアダプターの小さな箱を見ていた。

メイジ操縦士がとなりで薬物のパッケージを見せびらかした。ティプレイ・エス力魔法使いは目を見張ってつぶやいた。

「逆コースですね。……これ、視覚処理強化剤……」

視覚処理強化剤はビデオが止まって見えるとも言われている。

薬物に氣をとられている二人を見て、ホイヤン船長は渋い顔をしてつぶつけた。

「そう、リゲル三十三では、油田地帯の領有権をめぐる地上戦の噂がある。我々は、どちらへも介入しない。中立を保つ。……こらっ！、二人ともまじめに聞け」

「にゃん」

メイジ主任が顔を上げた。

「俺も、それが良いと思います。ただ、リゲル三十六には舩船がないから、燃料を満タンまで積み込まないと」

男たち二人も賛成した。

船長はつづけた。

「それと、お客様が二人乗ってくる。リゲル三十三が目的地だ。シヤーレイ君が客室乗務をこなすけれど、みんな失礼のないように。と言つても無理だろうから、できるだけ顔をあわせるな」

「にゃん？」

「こんな、ぼろ船に？」

「どのようなお客様なのですか？」

猫男と操縦士は驚いたけれど、ティプレイ主任が興味津々というぐあいで聞いた。

船長は得意げに言う。少しだけ鼻が高くなったようだ。

「我が愛しきボイシアナ号も旅客輸送をはじめることにした。今回はテストケースだ」

ああ、やつぱり。私の予感にあたっていた。

「一人は、固体ロケットブースターのセールスマン。もう一人はリゲル三十一の統計局の役人だ。猫男。あまりなれなれしくするな」
モンゴメリ主任は、にっこり微笑んでうなづいた。

「にゃーん。タラのフライをサービスしないと、白身魚の切れ端を作りすぎてあまりまくってます」

翌日。

二人の客は荷物をもってやってきた。

ブースターのセールスマンはおとなしそうな男で黒縁のめがねをかけていた。統計局の役人は、長い黒髪に目鼻立ちのはっきりした若い女性だった。控えめにお化粧して美人と言えなくもない。

私と船長でお迎えして、船室に案内した。お客さんは二人とも無

重力と電磁靴になれていない。アヒル歩きになっていた。

「航路のつごうでリゲル三十六に寄ってから、三十三に向かいます。良い宇宙の旅を。……一生の思い出に」

船長が揉み手をしながら狭い通路を案内していく。

「何かありましたら、こいつ……客室係りのシャーレイ君に言いつけてください」

「めったに使われない船室ですので、きれいなままです。ぜひ、くつろいでお使いください」

私も調子を合わせて本当のことをしゃべった。そうしたら、船長に肘で背中をつつかれた。

船室に旅行鞆を押し込んで、統計局の美人役人さんに窓を開けてみせる。暗い星空が見えた。乗客として最低限のマナーを伝える。

「通路での遊泳は禁止です。でも部屋の中でしたらご自由に。ただし、なにかあっても保険が効きませんので怪我のないように。あとブリッジは立ち入り禁止です」

大きな客船なら、遊泳場があつて飛びまわれるのだけど、ボイシアナには、そんな贅沢設備はない。

同じようにブースターのセールスマンを向かいの船室に案内した。きれいな役人お姉さんは微笑んでくれたのに、この体格の良いおじさんは無愛想だ。でも、チップをくれようとしたので断ったのだけれど、良い印象を受けた。根は親切な人かも知れない。

ボイシアナ号は、もとは艦隊所属の十四人乗り艦だった。良い意味で堅実で悪い意味でそっけない。

もうすぐ出航だ。旅客を案内したあと、ブリッジにいった。

メイジ操縦士は燃料系を見ていた。タンクへの液体酸素と液体水素の充填を確認していた。

猫男は船長を見ると訴えた。

「にゃん。食料の積み込みを拒否されました」

「なんだと？」

船長はコンソールに手をついて、猫男に顔をよせた。彼は手をあげて止めた。

「吾輩に文句を言われても……銀行口座の残高が足りないとのことですよ」

船長は怒った。すぐディスプレイをつけて担当者呼び出した。

「こちらはボイシアナ号。艦隊チャーター船だ。すぐ要求した物資を運び込め」

「あー、こちら補給所。金なしには売れないよ」

「艦隊チャーター船だ。物資を優先的に配分してもらう権利がある。航行規則の一般条項二二条を知らないのか？」

相手の補給係りがあざ笑った。

「規則二二条は燃料と空気と水についてだ。食い物は関係ない」
「……」

さすがは秩序と安寧の宇宙、リゲル三一だ。規則を厳格に適用してきた。

船長はディスプレイを切って、環境主任の猫男と相談した。

「にゃん……買い込んでおいた冷蔵庫の食料は四日分ありますが、その後はフードジェネレーターで合成しないと、食事が足りなくなります。炭素用プロパンと微量元素も足りるかどうか？ 特に亜鉛とマグネシウムが……栄養なしのすかすかのグリル料理くらいなら……」

「わかった。そのあとはドーナッツでも食べよう。タラは食べないからな」

メイジ操縦士は肩をすくめると、黙って計器を見つめていた。

そうか。光子魚雷と増設アダプターの代金が引き落とされたのだ。

燃料の積み込み完了。

キャプテンシートに座っていたホイヤン船長が乗客にアナウンスした。

「みなさま、これより愛しきボイシアナ号は出航します。乗客の方

々は船室でシートベルトをお付けください」

メイジ操縦士がステーションに連絡した。

「引き舟準備良し。ポート分離」

ボイシアナ号は舳に引かれて、加速を始めた。燃料を満載して船外ラックにも荷物を積んで質量が増えた船は、二隻のバージに曳航されてゆっくりと加速した。

深い漆黒の虚空を目指していく。

空間転移航法は重力源を真後ろに見て行われる。

恒星と惑星系を背後にして旅人になる。

規定の速度に達したとき、牽引ロープが分離されて、お別れの信号が送られてきた。

「貴船の安全なる航行をお祈り申し上げます」

ずいぶん気取った電文を送ってよこした。

「ご協力を心より感謝します」

こちらも形式的に返してやった。

ボイシアナ号は等速直線運動に切り替わった。

ブリッジに乗組員が全員が集まった。シートベルトを装着して各自の持ち場についていた。いつもどおりの手順で船は進んでいく。

「出力九十パーセント」

「充填率八十パーセント。転移可能です」

メイジ操縦士の命令に、私は答えた。

ティプレイ主任も珍しく制服を着て、ドライブを操作していた。

「いくわよ！」

四つの円が重なって、空間転移の準備ができた。電力も充分だ。メイジ操縦士ドーナッツを口にくわえると、空間転移機のスイッチを押した。

りゅいん！

ボイシアナ号は船体を震わせて、十七次元空間にとびこんだ。ホイヤン船長が位置確定のためにスキャンをはじめると

「あのー、すみません。ちょっと困ったことが……」

ブリッジの入り口から、聞きなれない男の声がした。

空間復元の準備をしていたみんなは、いっせいに振り向いた。スーツを着たセールスマンの男がブリッジのドアを開けて入ってきた。電磁靴に慣れていない。よろけて、コンソールに手をついた。

「客室係りさん……」

立ち直って、すばやく私の後ろにまわると、白いナイフを内ポケットから取り出した。私の首すじに当てた。低密度エアロゾルナイフのようだった。

「すまないが、この船を乗っ取らせてもらっ。むだな抵抗はしないように」

私は必死で心を落ち着けた。これはハイジャックってやつだ。マニュアルどおりに対応しないといけない。——ともかく話しかけて、相手を和らげなくては。

少しばかり声が上がってしまった。

「お、お、お客さん、こ、困りますね。うちはそういう船じゃないんです」

「そうだ。今、いいところなのだ。出て行け」

ホイヤン船長が応援してくれた。

「船長さん。申しわけないが、腰の拳銃をこっちに渡してもらおう」
セールスマンはナイフに力を入れた。

私の首筋に冷たい感触が走った。

あまり、ナイフの切れ味は良くなさそうだ。

「ぼ、暴力は良くないですよ」

私はすわったまま目だけ動かした。ホイヤン船長の声がした。

「お客さん。君、邪魔なんだよ。いま、どういう状況かわかっていないようだな。船が浮かんでいるのは十七次元の空間だ。復元に失敗したら、次元の迷子になる。悪いことは言わない。ナイフを捨てる」

船長の説得にセールスマンは冷たく答えた。
「まず拳銃だ」

スキャンを止めたホイヤン船長は、少しのあいだためらっていたようだが

「ほらよ」

かぶせ蓋を開いてホルスターから抜くと、黒い拳銃をブーメランのように投げた。

乗っ取りのセールスマン腕を伸ばして、取ろうとしたようだ。
わずかに体が動いた。

「にゃん！」

一瞬の隙について、シーとベルトのリリースボタンを叩いた猫男が飛びかかった。私の首からナイフの感触が消えて、殴る音がした。猫男とセールスマンが、一つの固まりになってブリッジの壁にぶつかるのが見えた。

船長も席を蹴ると、壁にあたって跳ね返って、宙に浮かんでいた拳銃を取り返した。無重力の中で浮かんでいたので、私は手を伸ばして船長の足をつかんだ。そのまま、引き摺り下ろす。

かちり。

撃鉄を起す小さな音がした。

「動くな」

船長はセールスマンに銃口を向けた。

「猫男！ 空間欠陥だ。左！」

メイジ操縦士が叫んだ。

「にゃん！」

もう一発、男を殴った猫男があわてて席にもどった。計器の数字を一瞬で確かめて光子魚雷を撃つ。間に合ったようだ。ディスプレイの暗黒部が光で埋められた。

「シャーレイ君」

船長が私を呼んだ。シートベルトをはずして寄っていく。男は床

に倒れてこちらをにらんでいた。

古めかしい回転式拳銃を渡された。

黒光りしている。撃鉄は起されていた。

「動いたら撃て」

拳銃を渡された。

「撃っちゃって、良いんですか？」

「郵便船に手を出すような奴だ。遠慮なしに、やれ」

船長も席にもどってスキャンをはじめた。

ドライブ主任に声をかける。

「タイプレイ。だいじょうぶか？」

「は、はい」

タイプレイ主任の声も上ずっていた。

船長はスキャンを再開した。

「第一ポイント確定」

私はセールスマンに銃を向けたまましゃべった。

「実はさ、僕、拳銃は初めてなんだ。だから、動かないほうが良いと思うよ。どこに当たるか分からないし、つい、うっかりつてもあるから。トリガーハッピーって言うのかな。ビデオで見てたりしてけっこう、ボク、あういうのに懂れているんだ。ボクに合った役になって、思ったりしたりして。でも、撃たれるとやっぱり痛いだろうね。それに猫男は動きがすばやいし、船長は魔女で射撃がうまいし、じっとしているほうが身のためだと思うよ。だからね……」

セールスマンは口を歪めて声もなく笑った。

「シャーレイ君。よけいなことは話すな」

船長に怒られた。

「第三ポイント確定」

船の仮位置が決まった。空間復元だ。

「にゃん」

猫男の鳴き声といっしょにまた、光子魚雷が発射された。

「ずいぶん荒れてるな」

メイジ操縦士がつぶやいた。そのまま船は方向を変えた。加速度が加わると、拳銃の弾道は、どう変わったつけ？ たしか……無重力なら弾道のドロップはキャンセルされて……

そんなことを考えていたら、

りゅいん！

現実の空間にもどった。

はずなのだが、自動受信機は沈黙したままだった。

何か手順をまちがえたか、不測の事態が起きたのか。いやな予感を振り払いながら。ポリウムを上げる気配がした。

「……ようこそ、リゲル三十六へ……寂漠たる宇宙の、、遠き旅路の果て……うらぶれ通りの切れたネオンサインは遥かな旅情を呼び起こし……吹きすさぶ太陽風に襟を合わせて歩きましょう……こちらはりゲル三十六静止軌道ステーション……」

弱弱しいビーコンの音が歓迎してくれた。大きな中継点のように誘導ビーコンはばら撒かれてなく、ステーションからの直接誘導だった。

「ああ、百二十五万キロ。誤差が大きすぎます」

ティプレイ主任の嘆きが聞こえた。動揺していたようだった。

スクランが終わった船長が私のそばに立った。私は拳銃を返した。セールスマンに向けて冷たい宣言。

「船長の権限により、おまえを逮捕する。乗っ取りの犯人には、小惑星で楽しいニツケル堀りが待っているぞ」

言ってから、猫男を走らせて保管庫から拘束用手錠を持って来させた。

「保管庫の暗証番号を忘れて苦労したよ」

そう言って、もどってきた猫男はセールスマンに手錠をかける。

そのまま、船長と二人で後ろ手のセールスマンを引き立てて船室の搜索に行った。

「どうなるのでしょうか？」

「なるようになる」

ティプレイ主任の心配そうな質問にメイジ操縦士が答えた。操縦桿をひいて、減速を開始した。

「コーヒーでも淹れてきます」

私は提案した。

「わたくしは麦芽コーヒーをお願いします。カフェインは健康に良くありません。それとお砂糖はいりません」

「俺はココアね。砂糖たっぷり。ついでにドーナッツも三つ。みんなに俺のおごりだ」

すこし、余裕が出てきたようだ。

食堂に行つて注文をそろえてきた。ブリッジにもどつて、ドーナッツをかじろうとしたとき、船長から船内通話で呼び出された。

「シャーレイ君。倉庫から押収用の入れ物を持つて船室に来てくれ」
本当に人使いが荒いな、と思いながら、食べかけのドーナッツを宙に浮かせた。

倉庫から特大のコンテナを引っばつて船室に行った。まあ、無重力だから重いものでも苦労しないのが宇宙船勤務の良いところだ。

着いたところで、向かいの船室にいる役人お姉さんがドアを開けて聞いてきた。

「何かあつたのですか？」

ドアのすきまから手錠をかけられたセールスマンを見て目を見張っていた。

「ちよつとしたトラブルです。もう解決しました。ご安心ください」
嚴重にドアをロックしてから、セールスマンの私物を全部押収する。船長が品名を読み上げて私が記録していく。押収物はコンテナに収めた。

「にやにやにやーん。君は保安主任である吾輩の管轄下にある。抵抗は無意味だ」

猫男がセールスマンの身体検査をして、ネクタイとベルトを取り

上げた。

それから、手錠をはずしてやった。ドアをロックして男を閉じ込めた。

インターホン越しに猫男がからかった。

「にゃん。夕食は白身魚のスープと寒い海を泳ぐ白身魚のフライと海の底を泳ぐ白身魚風味の力ボチャサラダだ。楽しみに待っていたまえ。なお、食事の量に制限はない。おかわり自由だよ。吾輩の心からのサービスをうけてくれたまえ」

白馬の王子様

白馬の王子様

静止ステーションとドッキングしたあとも猫男は船長室で押収物を詳しく調べた。武器や通信機は出てこない。

その横でホイヤン船長は法令の調査に掛かりつきりになっていた。リゲル三十六の係官は、ボイシアナ号が艦隊チャーター船であることを盾にして、乗っ取り犯人の引取りを拒んできた。

「我々は司法機関で軍の管轄下の艦隊とは指示系統が違います。お断りします」

高強度量子暗号回線の向こうで係官は繰り返した。押し問答したあげく

「ほんと、だめ男って融通がきかないよな」

無線を切った船長にのしられていた。

「私と猫男で交渉をつづける。シャーレイ君。荷揚げを頼む。必要なら、ティプレイも使ってくれ」

メイジ操縦士は宇宙服を着こんで船外ラックの固体ロケットブースターのチェックに行っていた。セールスマンというのも怪しい。でも、伝票に指示がある以上、ブースターを捨てていくわけにもいかない。

検査していたメイジ機関士からの無線がささやいた。

「今のところ異常なし。二本目の調査に移る」

とりあえず筋肉質は手一杯のようだ。

ここで荷揚げ作業を、気まぐれなティプレイ主任に手伝ってもらっても……

「ひとりで……やります」

「がんばってくれ。試験のときの推薦状はまかせろ」

ホイヤン船長は片目をつぶって励ましてくれた。

書類の束を鞆に詰め込んで、私はステーションの荷役受付に行った。

「良く来てくれたね」

作業員も係員もみんな笑っていた。ひさしぶりの郵便船らしい。郵袋と雑貨の入ったコンテナを下ろして、書類と照合していく。

私の立会いの元、はりきってパワーアシスト装置をつけた作業員が次々と手紙のコンテナと荷物をボイシアナ号の船腹から運び出していた。作業は順調だ。

「あの、郵便船のクルーの方ですか？」

立ち会っていた私は後ろから声をかけられた。

何かまずいことでも起こったのがと思って振り向くと、濃い茶色の髪の女性が立っていた。首から銀色に縁取りされた記者の身分証明書を下げていた。

軽くうなづき返すと

「リゲル三十六ネットワークです。インタビューよろしいですか？」

えっ？

私は、とっておきの笑顔をアナウンサーに見せてあげた。仕事は第一印象が大切だから。

事情を聞くと、小学生向けの『働く人シリーズ』のビデオ撮りも兼ねているらしい。私は胸をはって、制服の郵便マークが良く見えるようにしてあげた。

「郵便船のお仕事は大変ですか？」

ありきたりな質問だった。

私は腰に手を当てる郵便主任であることを強調してから、郵便を運ぶチームワークの大切さを答えてやった。宇宙船のクルーと地上

スタッフが協力して速やかに届ける必要がある。それが葉書一枚であつても。

「深宇宙は危険が一杯と聞いていますが？」

ありきたりな質問だった。

私は転移航法や空間欠陥のことを話してから、保安主任と船内クルーのチームワークの大切さを答えてやった。

猫男のことは黙っていた。小さな子供たちの夢を壊してはいけない。

「軌道上から見たリゲル三十六の印象は？」

ありきたりな質問だ。

私は惑星開発と環境倫理学と生命の本質について話してから、宇宙探査における未踏領域でのチームワークの大切さをマイクに向かって答えてやった。

「……ありがとうございます……」

茶色の髪と瞳の取材者は、こわばったような顔で答えた。

おもしろそうだから乗っ取り犯のことをしゃべりそうになったけれど、さすがにそれは控えておいた。口に出したら、ホイヤン船長に撃ち殺されるかも知れない。

でも、すっかり口が滑りそうになる。

私は最後にマイクをつかんで、カメラに向かって、平和の指サインを送りながら、笑顔で付け加えてやった。

「郵便をご利用のときは『お手紙がんばれ組合』のボイシアナ号をよろしく。低料金、迅速、どんな辺鄙な田舎にでもお届けします。通信販売も扱っていますので、お得な料金で満足一杯です。こんど、旅客サービスもはじめました。料金はご相談に乗りますのでお気軽にどうぞ！」

事実、リゲル三十六は寂れていた。

環境倫理学の指針にしたがって、惑星固有の生態系を乱さないよ

うに極地帯に居住地が建設されて、人口制限がかけられていた。ペルセウス腕の開発が決まれば、ここも中継点として発展するかも知れないが、今のままでは辺境のあばら家という感じだ。

それでもステーションで働いている人たちは楽しそうだ。

荷揚げの作業と新しい郵袋コンテナの積み込みが終わった。帰ろうとすると引き止められた。みんな情報に飢えているようだ。

事務所の休憩室で

「どうぞ、お召し上がりください。ご主人様」

紺色の服の上から白い前掛けをつけて、頭飾りをのせた古風なコスチュームをまとった係員が深くおじぎをすると、膝まづいてからジュースカップを渡された。

サービスまで古臭いけれど、悪い気はしない。できれば、ホイヤン船長が同じことをやってくれれば、最高だな、と思った。でもそれは、猫にお預けを教えるような難しさだろう。

地表で栽培されたオレンジをわざわざステーションまで持ち上げてから絞ったフレッシュジュースをご馳走になって、手提げ袋に入ったチョコレートをお土産にもらった。

古くからの習慣で、郵便配達人へのプレゼントはチョコレートと決まっている。私はお礼を言って別れをつげた。

船にもどると、船長室で猫男とホイヤン船長が相談していた。犯人の移送は拒否されていた。

「にゃん。奴を連れて行くはめになった」

「シャーレイ君。ブリッジのドアの暗証番号を変えた。8747だ。覚えておいてくれ」

「にゃん。みんなで0を押していたんで、すり減っていて分かってしまったようだ」

まへの暗証番号は0000だ。あまりほめられた話ではないが、緊急事態のとき迷わないように、そう決められていた。

「それは？」

私は船長の机の上にあつた紙を見た。折り目が強く付いていた。

「奴の手帳の隅からボイシアナ号の平面図が出てきた」

「でも、吾輩の見る限り改造前の艦隊所属艦のときのだ。救命ポツドを撤去する前の構造だね。ちよつと昔の資料をあたれば、どこでも手に入る。にゃん」

私はステーションでもらつたお土産の袋を持ち上げて机のうえに置いた。

「やるじゃないか」

チヨコレート好きの船長は袋を開けながら笑つた。

「にゃにゃん。吾輩は甘いものは苦手だ。私の分は君にあげるから……」

「お断りします。夜は一人で寝ます」

明朝。

疲れていたせいか、私は寝坊した。

船長からのインターホンで起された。

食堂でコーンフレークをかきこんでブリッジにむかった。タイプレイ主任以外は配置についていた。

「シャーレイ君。試験のときはくれぐれも寝坊しないように」

船長が苦笑混じりに言う。また、恥をかいてしまった。

出発。

犯人を乗せたまま、ボイシアナ号はドッキングポートを離れて加速を開始した。舳船が用意されていないため、自力噴射によるゆっくuriとした加速だった。

ブリッジにタイプレイ主任はいない。またご機嫌麗しくなく船室に閉じこもっているようだ。

「船体速度、秒速8.5キロ」

ブリッジのディスプレイには黒を背景にして、海の青と森の緑と雲の白を浮かべて三日月の形になっているリゲル三十六の様子が映されていた。命があふれる惑星はきれいだ。

大陸の赤みを帯びた大地は開発をまっけている。

青白いリゲル三十六の主星も頼もしい。

ボイシアナ号は、反対側の真っ暗な深宇宙を目指している。生命の源への別れがおしくなった。

私が感傷にひたっていると、メイジ操縦士が話しかけてきた。

「さて、ドライブ主任がいないが、どうする？」

「にゃーん」

スキヤナー席で、船長は邪悪な笑みを浮かべた。

「シャーレイ君。白馬の王子様になれ。そうしたら、私の顔をマジックで塗りつぶしたことは、ぜんぶ水に流してやる。それで手を打て。チームワークが大切なんだろ」

「パパベル君。吾輩もチームワークは大事なことだと思っよ」

猫男もほくそえんでいた。

え……？

どっかで聞いた言葉だ。船長がつづけた。

「シャーレイ君。インタビュの最後のところ良かったよ。なかなかやるね」

え……？

「ぶっくく」

メイジ操縦士が口を押さえて笑った。

ホイヤン船長が得意げにコンソールを操作すると、ブリッジ正面の大型ディスプレイに私が映った。背景はリゲルステーションでボイシアナ号の銀色の船体が輝いていた。腹には識別マークの黄色い『違い輪』が描かれている。

私はインタビューを受けて、一生懸命チームワークを語っていた。なるほど、自分の声は外からはこんな風に聞こえるのか……。

私が寝坊しているあいだに配信があったようだ。

配信元はリゲル三十六ネットワークだった。全部録画されていた。

あのインタビュワーを絞め殺してやりたくなった。

「シャーレイ君。ベテルギウス中継点で、責任をとってくれると言ったよな？ なっ？ なっ？ なっ？」

ホイヤン船長の邪悪な目がしつこく光った。

私はあきらめた。

船室にもどってから、ホイヤン船長が通信販売で取り寄せた王子様セットを身に着けた。白タイツを穿いて、ビデオに出てくるファンタジーっぽい白いかぼちゃパンツを穿いて、ファンタジーの登場人物のような金色の縁取りとふりふりひだひだの襟飾りと袖飾りの付いた上着を着て、ボール紙に窒化硼素を蒸着したようなピカピカの安っぽいファンタジーのような王冠を頭に載せた。

軌道への打ち上げコストが高かった時代の名残で、通信販売の品物は軽くできている。そのせいで、いかにも薄っぺらでインチキっぽい。

着がえが終わったところでブリッジに呼び出された。行ってみると船長が化粧道具を持って待っていた。ホイヤン船長はいつも素顔で過ごしていたので、意外だった。

椅子にすわらされて、唇にルージュを塗られて目に化粧をされた。付けまつげまで準備されていた。長いのをつけられた。なんか、瞼が重い。

渡された鏡を見た。

「なんか、王子様っていうより、間抜けみたいですね」

私は率直に感想を言った。でも、唇はつややかに光っている。目力が増えたようだ。

なんか癖になりそう……

「ぷつくく」

「にゃーん！ 似合っているよ。吾輩は笑ったりしないから……にゃっぷ！」

筋肉質と猫音も復讐のおいしさを味わっているようだ。二人とも頬がゆるんでいる。

ボイシアナ号は秒速8.5キロで等速直線運動を続けていた。

ホイヤン船長が化粧道具を片付ける。

「さあ、終わった。魔法使いを口説いて連れて来い。急いでリゲル33に行く。なんだったら押し倒しても良い。ティプレイの親はパロディアの銀行家だからな。玉の輿だ。どうだ？」

「それよりも、僕は……」

私は嫌味を言っちゃった。

「船長のお婿さんになりたいです」

「ふふーん。チークもつけたいようだな？　ん？　もう少し化粧を濃くするか。んっんっん」

船長は小さなブラシを取り出した。

それは遠慮しておいた。

ブリッジを出て通路を歩いていく。食堂によってティプレイ主任の保管庫から、キビのお粥セットを取り出して、熱いお湯を注いだ。朝食だ。

船室に向かっていると、役人お姉さんに会った。朝からきちんと黒のスーツを着ていた。私を見て驚いた顔をしていた。それから不安げな表情になった。

「あの、それは？」

適当にあしらってやる。ドライブ主任が引きこもっているなんて、細かい事情を説明しても分かってもらえないだろう。

「ご心配なく。ちょっとした機関関係のトラブルです。修理のための特殊防護服を装備しました」

「……まあ、それは……大変ですね」

社交辞令みたいに冷たい言い方だった。

役人お姉さんと立ち話をしていたら、ティプレイ主任が船室から出てきた。砂漠色のキュロットパンツをはいていた。私はすぐ理解

した。

魔法使いは古典ビデオに影響されて名無しのエレインになっていた。僕はハンターになるべきだった。

「あら、シャーレイ様。そのかつこうは？」

こっちの苦労も知らないで、何事もなかったようにささやいた。それから、役人お姉さんを見た。

「どちら様でしょう？」

「リゲル三十一統計局のフロギンスです。あなたは？」

紺色のスーツを着たフロギンスさんがびしりと決めた大人の魅力なら、ティプレイ主任には、魔法使いの破れかぶれな凄みがある。

「ドライブ主任です」

「そう、郵便屋さん？ 素敵なお洋服ね」

二人のやりとりを見ていて、私はわくわくしてきた。

女の対決つてすげーや。ちらりと走らせる視線と氷のきらめき口調で、相手を切り刻んでいくぜ。

ティプレイ魔法使いは、おされ気味みたいだった。

「すぐに空間転移航法にうつります。船室にいたほうがよろしいのでは？」

「ありがとうございます」

役人お姉さんは、ふわりと肩までの黒い髪を翻すと、うしろの船室にもどっていった。

電磁靴に慣れていないので、歩き方が残念だ。踵の高い靴でもはいていたら……

となりで対決を見ていた私の感じでは6対4でお姉さんが勝ったようだ。

冷たいドライブ主任の声がした。

「シャーレイ！ 行くわよ」

私のことを呼び捨てにしている。相当怒っているようだ。ブリッジに行く。主任がいくら暗証番号を押してもドアが開かない。

「なによ！ これ！」

「魔女医者様。暗証番号が変わりまして、ござりまする」

「ちよつと。ホイヤン聞こえる？」

ティブレイ主任が船内インターホンに叫んだ。いろいろと通話機ごしの会話があった。船長が8747と言う声がかすかに聞こえた。魔法使いが黄金の指を躍らせていく。ドアが開いた。

ドライブ主任は急いで席に着くと、コンソールのスティックを操りだした。

「あの女。なによ。ちよつと私が素顔だったからって馬鹿にして」

「みんな席に着け。——ティブレイ。いいぞ。やれ」

ホイヤン船長が命令した。

魔法使いはディスプレイに描かれた四つの円を一致させた。横から見ていたが、操作は良く分からない。

空間転移ドライブの原理は四次元の立体にメスを入れて、三次元の球を取り出す、と言われているが、やっぱり私にはできそうもない。これだけは空間把握の才能って奴がものをいう。私だってリングは半分に切れるけど、四次元の立体なんて頭の中に浮かべて切れない。

体が引きつるような感じがした。復元するときにもう一度。ボイシアナ号は34光年を飛んだ。

リゲル33からのビーコンが届いた。

「おお、我が故郷、リゲル33。どなたでも寄っていい。きれいな水とうまい飯が待っている。時がうつればここも繁華街になるでしょう。あなたも今のうちに投資してみては？ 早いもの勝ちでっせ。絶対儲かりますとはいえませんが、内緒の話として、期待してもらって良いですよ。戦争なんて起こりませんから。噂ですよ。う・わ・さ」

私はステーションにボイシアナ号の識別信号を送った。

メイジ操縦士が

「う、ござ、じゃなくて……距離三十八万キロ。ドライブ主任様。

いい腕です」

「……すばらしいよ。にゃん。さすがはティプレイ主任だ」
メイジ操縦士と猫男はいつしよに拍手して、ドライブ主任を讃えた。

「俺のおごりでドーナッツだ」

「じゃあ、メイジ主任に甘えて飲み物も持ってきてきましょう。代金は操縦士のツケにしておきます」

私は立ちあがってドアにむかった。

ロックを空ける前にドアがかってに開いた。

「？」

フロギンス役人お姉さんが立っていた。自分で開けたようだ。

「困ります。ここは立ち入り禁止で……どうやって、開けたのですか？」

役人お姉さんの手には白い塊が握られていた。よく見ると上下二段になった小型の拳銃だ。ステーションの検査装置にかからないようにセラミック製みたいだ。

かちり。

撃鉄を起す音がして、きつい声でおどされた。

「中へ入りなさい」

「せ、船長ちようう」

頭のとっぺんから声がでてしまった。

ホイヤン船長が、あわてて拳銃を取り出している気配がした。

「動いちゃ、だめ」

フロギンスお姉さんは、静かに言った。船長も左腰の拳銃ホルスターから手を離して静かに答えた。

「シャーレイ君。言われたとおりにしる。こいつは本気だ」

両手を肩まであげた。

フロギンスの声が私に命令した。

「間抜けな王子様。すみに行つてなさい」

銃声

銃声

フロギンスおねえさんは、ボイシアナ号の乗組員を全員、いつでも五人だけれど壁際に立たせた。そろって手を上げた。電磁靴をはいていないティプレイ主任は、浮かび上がりそうになっていた。それから、フロギンスは銃口を動かしながら猫男に命令した。

「船室の客を解放しなさい」

「ぶにゃん！」

「モンゴメリ君。言われたとおりにしろ」

不満の鳴き声を上げた猫男を、船長が鋭い口調で抑えた。

猫男は挑発するように女に言った。

「銃弾は二発しかないことを覚えておけ。にゃん」

フロギンスおねえさんを威嚇する。でも、怯む様子もない。

「さつさとやりなさい」

「ふしゃー！ 船長とシャーレイ君がいつしよに飛びかかれば、吾輩に撃つ弾は残らないぞ」

「でも、どうせ口先だけ。言われたとおりにしなさい。ドラ猫ちゃん」

渋りながら保安主任は、コンソールの盤面を操作して船室のロックをはずしたようだ。

用が済むと猫男は追い払われて、メイジ操縦士となりで手を上げた。

しばらくすると、セールスマンがブリッジのインターホンから呼びかけてきた。

「アプリコット。ロックの番号は？」

8747

監禁されていたセールスマンがブリッジに入ってきた。いったんあたりの様子を見てから、ホイヤン船長に目を向けた。

「拳銃をよこせ。左手で」

ホイヤン船長がゆつくりと動いて、古い回転式拳銃はセールスマンに向かってゆつくりと宙を進んでいった。

「アーモンド。今度は気をつけろよ」

フロギンスが相棒のセー
ルスマンに声をかけた。

ぶつ

ティプレイ、ドライブ主任が鼻で笑った。

「あらー！。アプリコットとアーモンド。コードネームなのにゼンスないわね。夏ミカンとヒヨコマメのほうがお似合いよ」

「タイププレイ、黙ってる」

船長が注意した。

「にゃん。手が疲れてきた。下げてもよろしいか？ 猫の虐待で動物保護団体に訴えてやる。吾輩の仲間を呼んでくるぞ」

「ドーナツ食わせてくれ。それと精神安定剤もだ。こんなのやってられるか」

ボイシアナ号の魔界の生き物たちは、どんなときでも文句を言うのは忘れない。

私も負けないように、
ついでに

「ちょっと、お化粧を落としたいんだけど」

セールスマンでアーモンドの男に、銃を向けられた。船長がなだめた。

「シャーレイ君。私の銃の一発目は練習用の空砲だ。薬莢だけだ。安心したまえ」

「それじゃ、二発目は？」

「撃たれてみれば分かる」

そんな……

でも、邪悪な船長なら……この辺で二人組みをだますための仕込

みをしているかも知れない。思い切って聞いてみた。

「三発目は？」

「……ネズミ撃ち用の拳銃散弾だ。顔に食らわなければケガはしない」

フロギンス、コードネーム「アプリコット」はスーツの内ポケットから黒い直方体を取り出した。アーモンド「セールスマン」に渡した。

「やれ」

にやりと笑ったセールスマンは、黒い直方体をコンソールの操縦士席のわきにある、投入口に入れた。ボイシアナ号のプログラムを書き換える気だ。

でも、管理者権限がないと、それはできない。

当然のように、途中で止まった。

「さて、船長。書き換え用の合言葉を教えてもらおう」

「やなことだ」

フロギンスは腕をのばして、私に銃口をむけた。

セラミック拳銃の黒い穴がこつちを見ている。ということは、私の眉間を狙っている。他のことを考えてみたけれど、やっぱり頭が目標だろうな……

「不発になーれ！」

ティプレイ主任が人差し指を躍らせながら、セラミック銃に呪いの魔法をかけた。

「にゃん。撃つたら喉笛に噛みつくぞ。吾輩を一発で仕留められると思うなよ。九代たたってやる」

猫男も加勢してくれた。でも、フロギンスの指にゆっくりと力が込められていった。

小型銃の引き金は重いはず。でも、あと少し。

なんか人生って、良いことがないんだな。急に終わるみたいだし。でも、できるなら、こんな王子様の格好で死にたくなかった。親は

嘆くだろうな。

そのとき、追いつめられた船長がつばやいた。

「……躑けられたもふもふ犬……」

フロギンスは笑って、セールスマンは黒い直方体を奥に押しこんだ。船長の声紋に応答してプログラムが書き換えられていく。

「……やめてくれよ……」

メイジ操縦士兼機関士が悲しそうにつばやいた。

セールスマンは立ちあがって、コンソールの裏から、白いボタン見たいなものを取った。

「にゃーん？ 疎密波盗聴器……」

猫男の鳴き声をフロギンスが嘲るように笑った。すぐわかった。

二人組みのうちセールスマンは捨て駒で、一回目に入ってきたときに盗聴器を置いていったのだ。ブリッジの会話は、フロギンス「アブリコットに筒抜けだった。その小さな機械にみとれているあいだに」「やめろって言うてるだろ！」

メイジ機関士が一步踏み出して、フロギンスに寄っていった。

「止まれっ！」

フロギンスは叫んだ。

メイジ機関士にとって船は恋人だ。大事なプログラムをこわされているのに止まるわけがない。

あとの事態は一気に進んだ。

銃声。

短い銃身から、長い火の矢が飛び出した。

「にゃん！」

とびだした猫男が操縦士の前で手をふるった。

きん、きん！

手で払いのけられた銃弾がブリッジの中で跳ねる音がした。船長はセールスマンに向かっていく。ティプレイ主任は飛びあがった。

「あう！」

メイジ操縦士のうめき声が聞こえた。

私は跳ねる弾を避けるために反射的に頭を低くした。
かちり。

セールスマンの手の中で、船長の銃がむなしい音を立てた。

役人おねえさんの手をつかんだまま、腹に突っ込んでいった猫男はフロギンス女と一塊になって、壁に飛んでいく。

ブリッジの天井を蹴って反転したティプレイ主任が上から手を伸ばして、セールスマンの銃を押さえた。床を蹴ったホイヤン船長がセールスマンを殴って、反動でうしろに飛んでいった。

猫男が叫ぶ。

「やったにゃん。撃鉄を押さえた。やっつける」

私は猫男に駆けよって、フロギンスの背中を蹴った。もみ合っているフロギンスのスカートがめくれて、ストッキングを吊っている下着が見えた。

何回蹴っ飛ばしても、効き目がない。二人とも宙に浮いていて、手ごたえのないボールを蹴っているようだ。めんどくさくなって、頭に蹴りを入れたらおとなしくなった。

メイジ操縦士は太もを押さえていた。手の間から、赤いものが見える。血だ。

駆け寄っていく。操縦士の電磁靴磁石を最強にして、ブリッジのすみに押してやった。靴が壁に吸い付いた。

ふりかえると、ティプレイ主任が浮かんでいた。右手で拳銃を押さえて、もう片一方の手で上からセールスマンに目潰しをかました。
「ぐー！」

左手で突いたけれど、よけられた。男の力で拳銃にかかっていたティプレイ主任の手は払いのけられた。男は引き金を引く。何も起こらない。

船長の拳銃は、いまだきめずらしいシングルアクションだ。男は

あわてて、撃鉄をおこした。
かちり。

宙に浮かんで手がかりがなくなって動けないでいるドライブ主任に狙いをつける。

「まで。撃つな。二発目は実弾だ」

壁を蹴った反動で、男に襲いかかろうとしていたホイヤン船長は叫んだ。そのまま、セールスマンの横を浮かんだまま通り過ぎていく。

セールスマンの背後から

「にゃん。銃を捨てろ。吾輩は射撃の名手だ」

男のうしろで立ち上がった猫男は、フロギンスから取り上げた小さな銃を構えていた。

「吾輩が保安主任でなかったら、おまえの頭をふっ飛ばしていたところだ。逮捕する。銃を捨てろ」

「そうかね、俺は保安主任じゃない」

ふりかえりながら、セールスマンは猫男に銃を向けようとした。

猫男はためらわずに撃った。

銃声と火薬の炎が噴出した。

きん！

ごす。

弾は外れた。猫男の撃った弾丸は壁に当たって跳弾になるとコンソールに食い込んだ。

男は狙いを崩さない。

というか、猫男のすばやさには反応できないで、引き金をしぼれなかったようだ。

「うにゃん……」

「へたくそ！」

猫男の鳴き声と船長のののしり声がいつしよになった。猫男は小型拳銃を男に向かって投げた。あっさりとかわされた。

優位に立った男が冷たい声で

「おい、小僧」

セールスマンは私に命令した。

「こいつをどうにかしろ」

銃口で宙に浮いていたティプレイ主任を示した。私は立ちあがってティプレイ主任のふくらはぎをつかんで下ろした。

漂っていた船長はブリッジの反対側の壁に付いた。電磁靴を効かせると壁をつたってこっちへ歩いてくる。猫男も床を歩いて来た。

「アブリコット。起きろ」

私たちを銃で威嚇しながら、セールスマンは女の相棒に向かっていき、起そうとしていた。

船長は操縦士のもとに行った。

「メイジ。だいじょうぶか？」

「ああ、かすり傷。気にするな……」

立ちあがって頭を押さえたおねえさんから、私は思い切りにらまれた。

ブリッジの片隅に乗組員の五人。ドアのところに乗っ取りの二人組み。にらみ合いになったが、二人はうなずきを交わすと通路に出て、ドアが閉じられた。

ドア越しに鈍い銃声がした。

「やった。次と次は空砲だ」

ホイヤン船長が言った。

「にゃん」

ドアに駆け寄った猫男が開けようとするが、ドアは動かない。開閉回路に銃弾を打ち込まれたようだ。

「猫男、手動でいけ。メイジ、待ってる。すぐ治療してやる。ティプレイ！ 学校でやった救急医療だ」

猫男は壁の窪みを開いて、手動開閉装置のハンドルを回しはじめた。

私はブリッジの床の蓋をあけて備え付けてあった救急箱から、救命キットを取り出した。ティプレイ主任に渡す。

メイジ操縦士が、意外と落ちついた声で

「奴ら、どこへ行くつもりかな？」

ふしぎそうにつぶやいた。

プログラムのチェックをしていた船長がすぐに反応した。

「猫男！ ドアを閉めろ」

「にやにやん？」

「あいつらの狙いは、避難ポッドだ」

「にやん！」

猫男は、ハンドルを逆に回す。私にもわかった。

ブリッジのドアが完全に閉じられた。

環境主任の猫男は、コンソールの保安主任の位置にすわった。

「にやん！ パパベル君。計算機！」

少しだけ上を向いた船長は、頭の中で数を数えているようだった。

猫男に命令した。

「よし、やつら、避難ポッドの場所に着いたはずだ。倉庫のドアを

両側ともロックしろ。閉じ込めてやる」

「にやん」

メイジ操縦士の作業服を切り開いて手当てをしていたティプレイ主任が

「ホイヤン。一種救命パックが必要です」

「もう少し、待っててくれ。奴らを窒息させる。猫男！」

猫男は、メイジ機関士から倉庫の容量と炭酸ガス消火器の時間当たり噴出量を聞き出した。

私がさし出した計算機で、炭酸ガス濃度を算出した。

モンゴメリ環境主任は、操作盤に手を走らせる。

「ぼうやゝ良い子だゝ眠っちゃえゝ二酸化炭素でゆっくりとゝ」

猫男は鼻歌混じりで、ボイシアナ号の倉庫を満たしている空気組成を変えていった。消火設備として、炭酸ガスは大量に船にある。

ティプレイ主任が、負傷した機関士を励ましていた。

「メイジ。もう少しです。がんばって」

「ああ……」

「にゃん！ 待っててくれ。いま空気を入れ替える」

二酸化炭素は意外と毒性が強いはず。二人組みを昏倒させて、しばらく無力化したあと、元気にさせなければならぬ。環境主任の猫男が頼りだ。私はバルブ切り替えのやり方を良く見ておいた。

倉庫の空気を計算上の標準組成にもどしていく。

船長が張り切っていた。

「よし。二、三分後に目覚めるはずだ。ごみどもを拾いに行ってくる」

「にゃん。吾輩の警棒術をみせてやる」

私はドア開閉の手動装置を回して開けた。船長と猫男が倉庫に向かった。

私も通路にでた。医療室まで走って、一種救命パックを取り出して脇に抱えた。ついでに食堂によってココアを入れる。

ブリッジにもどった。

すぐティプレイ主任は、うけとったパックの材料を使って応急手当をしていく。

「うお！」

消毒液がしみたようだ。筋肉質のメイジ操縦士が呻いた。落ちついたところで、ココアを渡した。苦笑いされた。

銃弾は貫通していた。残っていたら、摘出が必要になって厄介だっただろう。ティプレイ主任は、傷口に外傷用の人口皮膚を張って小さな医療アイロンを当てた。薄い人工膜は収縮して傷口を塞いでいく。

それから、細い指で、ティプレイ主任は使い捨ての皮下注射器の目盛りをあわせた。

「鎮痛剤と抗生物質です」

「魔女医者様、おねがいします。ぜひ鎮痛剤を多めに！ できればジアセチルモルフィンとジフェニルアミノコンドラミンのカクテルで」

操縦士の贅沢な望みは、却下された。ティプレイ主任は操縦士のくびすじにガン型の皮下注射器を当てると薬を打ちこんだ。

ふー。

操縦士は、深いため息をついた。鎮痛剤が効いてきたようだ。いまは看護師になっているティプレイ嬢が、脈をみている。

顔を上げると、私を見てうなづいた。とりあえず、ショック症状はないし、だいじょうぶ、という意味だろう。

ぐぐーん。

あれ？

船に加速度がかかった。ティプレイ主任と目が合った。あわてて、コンソールに調べる。エンジンが、かつてに動いていた。推定速度8・58キロメートル。加速している。

船長がブリッジに駆け込んできた。手には取りもどした自分の拳銃を握っていた。

「なんだ、今のは？」

私はコンソールの数字を指でさした。

「メイジ君。取り込み中を悪いが、ちょっと見てくれ」

操縦席に座っていたホイヤン船長が操縦士を呼んだ。私は、筋肉質の体を宙に持ち上げてから、襟首をつかんでコンソールの上に引いていった。

「ああ、これね……」

鎮痛剤が効きはじめたのか、奇妙な巻き舌で操縦士は上から話した。

「通常航法装置が……やられてる」

手を伸ばしてコンソールをいじる。

「量子暗号通信機もだめ。書き換えは避難ポッドのところでひつか

かったみたいだな。ハードの不適合ってやつだ」

少しのあいだ考えていたが、私に大型ディスプレイをつけるように言った。ボイシアナ号の前には、青い惑星があった。

しばらく、画面を見ていると、操縦士は黒い直方体がボイシアナ号に何を引き起こしたのか、理解したようだ。直感で軌道計算ができる男は、宇宙に五人はいる、と聞いたことがある。メイジ操縦士は、その一人のようだ。

「このままだとリゲル33第三惑星に突っ込みます」

とろんとした目で、みんなを見た。うすく笑って、つけくわえた。「流れ星になれますよ」

私はたずねた。

「修正用のバックアップは？」

「倉庫の中、でもね……プログラム書き換えの合言葉も変わっているはず」

「シャーレイ君。急げ！」

ホイヤン船長の命令で、私は倉庫に走った。

途中で、警棒を腰にさした猫男と会った。めずらしく気難しい顔をしていた。

「にゃん。やつらは始末した」

「えっ？ やつちゃったの？ 気密ロックから放り出したとか？」

猫男は人差し指を立てると、もったいぶって横にふった。

「そうしたいところだけど、吾輩は保安主任だからな、犯罪者の人権も尊重しなければならない。縛って船室に放り込んでおいた。窓を開けっ放しでね」

そうだ。猫は捕まえた獲物はいたぶるに決まっている。

窓を開けて、深宇宙の空虚さに対面させるとは、なかなか素敵なことをやる。

猫男に長く楽しめるおもちゃができたようだ。

私は教えてあげた。

「僕たち流れ星になるってさ」

「にゃん？」

「ブリッジに行つて」

猫男に言い残して、倉庫の備品室に付いた。操縦士から教えてもらった暗証ナンバーを打ち込む。扉を開いて、ずらりと棚に並んだ重要部品の中からバックアップ装置がバックされたスーツケースを引きずり出した。さすがはメイジ機関士。きちんと整理されていて分かりやすい。

走つてもどつた。

船長は自分の拳銃をホルスターに納めて、カバーをかけていた。メイジ機関士は、私が渡したスーツケースを気だるそうに開けた。二十個近くあるバックアップの中から一つ選んで、コンソールに押し込む。

拒否された。

「ふーむ。コアを書き換えてみるか……船長、合言葉を」

「……首輪をつけてワンと鳴く……」
だめ。

船長の声紋はあっているはずだ。おそらく合言葉が違う。

「こっちは……」

もう一つの直方体が試された。

だめ。読み込まない。

「カーネルの再構築だ。こいつで動かないなら……クリーンインストールしかないが、それをやると三日はかかる。あきらめてくれ」
メイジ機関士はつぶやいて、三個目の赤い直方体を押しこんだ。

こき、きき……

読取装置がかすかな音を立てた。

みんなの期待が集まる。

甘い吐息がささやかれて、スピーカーから陽気な船長の声が流れた。

「あうん。青いリングは初恋の味」

ディスプレイに犬耳と赤い首輪をつけたホイヤン船長の静止画が

写しだされた。首輪につながった鎖は画面の外に伸びている。ぴったりした黒い革の下着姿で犬みたいにお座りして、片手を上げて、にっこり笑っていた。やっぱり、胸は鉄板だった。右手のうしろには、赤青白のリボンをかけた緑のモミの木があった。

何かのパーティーでの記念写真みたい。

一瞬、映ってから、船長がディスプレイを切り替えた。でも、私は目に焼き付けておいた。落ちついたら、思い切りからかってやる。いい材料だ。

メイジ機関士が冷静に尋ねる。

「船長、これの意味は？」

ホイヤン船長をみんなで見た。船長もみんなを見渡す。目の下が赤くなっていた。

「う、うしろを、ふ、ふ、ふり返るな、っていうことさ」

「にやん！ どういうこと？」

「すんだことは後悔するな。もうだめだ。そういう意味だ」

「ホイヤン！ まだ持ってたの、捨てればよかったのに」

タイプレイ主任が驚いていた。

船長はメイジ機関士に強く叫んだ。

「絶対にこれは使わないって言ったじゃないか！」

「ふつつならね。でもふつつじゃない。あきらめて……でも秘密画像の隠し場所としては……なかなか」

言葉は途切れた。

メイジ機関士の目がうつろになっていた。痛み止めの注射が本格的に効きはじめたようだ。タイプレイ主任が機関士の手首を指先で握った。脈を見ていた。顔を上げて、横にふった。

「死んじゃう？」

私の質問にタイプレイ主任は首を横にふった。

「眠っただけ。でも、しばらくは起きない。鎮痛剤をいっぱいって言うから、サービスしてあげたの」

「シャーレイ君。メイジ君を医療室に運んでくれ」

私は機関士の襟をつかんで、通路を引っ張っていった。ティプレイ主任といっしょに医療室のドアをあけて、筋肉質の体を毛布で包んであげた。体が冷えないように、毛布の上から緩く拘束スリングを巻いていく。

でも、船長つて、意外と乗りやすいタイプなのか……

メイジ操縦士の顔に酸素マスクをつけて、呼吸をらくにしてやる。そのまま、安置してきた。気持ちよさそうに、ベッドの上で薬の夢を見ている。

このまま、リゲル33の大気圏に突っ込んで、ボイシアナ号の外郭が摩擦熱でとろけても、目を覚まさないで眠り続けそうだ。

それが良いのかもしれない。

いや、きっとそうだ。

流れ星になりたい

流れ星になりたい

船長は猫男をこき使って軌道の計算をはじめた。そして途中で投げた。通常航法用の測定機からのデータなしでは難しすぎる。

それから、モンゴメリ猫男があちこちいじって操船を試みたけれど、愛しきボイシアナは、まったくいうことをきかなくなっていた。つぎに、がさつな——私の意見ではなく、あくまでもメイジ操縦士の言い分だ——船長が細い指で操ったけれど、変わりはない。つまり、操縦不能。

惑星の質量に引かれて、少しずつ加速しているような気がする。まあ……気のせいだろうけど……まっさきに猫男があきらめた。

「にゃん。できれば惑星の夜の部分に突っ込みたいね。再突入でマインス八等級ぐらいの明るさで流れ星になってね。きれいだよ、夜だったら、みんなが見てくれる。あらかじめ知らせておかなかったのが残念だ」

「いやよ！」

ティプレイ主任は猫男に反対した。

ホイヤン船長はスキャナー席で、コンソールに肘をついて、自分の眉間を指先で揉んでいた。

長い息をついて、みんなに目を走らせてから

「さて、整理してみよう。ボイシアナはリゲル33第三惑星の大気圏に突っ込む。どうなる？」

「にゃん。我が愛しきボイシアナ号に大気圏突破能力はありません。解けてばらばらになって落下。吾輩たちは黒コゲ」

「シャーレイ君。そのとき地表の被害はどれくらいになると思う？」
予想していないときに、船長は私に質問してきた。でも、そんな聞いたことがないから、適当に答えてやった。

「……良く分らないです。船体は約三万トンの容積で、組み立てられた鋼材はたしか三千トンくらい？ 積荷に鋼材一万トン、雑貨で五千トン、合計して一万五千トンちょっとくらいかな……。半分燃え尽きたとして、地方都市一つか二つ、海か砂漠にでも落ちれば地表の被害は無いと思います」

顔をあげたホイヤン船長の眉間の皺が深くなった。猜疑心があふれている灰色の瞳も濃くなった。

「……そこだ。あの二人組みは、そんなことを狙っていたのか？ これだけ大騒ぎして、たったそれだけ？」

「首都に落とすつもりじゃ？」

私が答えると船長と目が合った。猫男も気づいたようだ。

「なに、なにになに？」

ティプレイ主任はきづかない。

私は教えてあげた。

「船の外に積んだ固体ロケットブースターです」

「メイジ君の調査では、異常なしだったけれど……」

船長も理解していた。

「にゃーん。やばいものが中に仕込んである」

「それって、もしかして、……NBCとか……ああ………農業生態を破壊しちゃう窒素固定細菌用のウイルス……」

ティプレイ主任も結論を出したようだ。

船長が付け足した。

「しかも、外から来た郵便船が違法に運んでいたもので、こちらに責任を全部、押し付けられる」

唇を歪めた猫男が吐き出すように言った。

「にゃん。空から降ってきた惑星外物質に汚染されて大騒ぎになっているところで、油田地帯をいただく。良い手だ」

そのとき、船内に無重力がもどった。加速感が消えた。

すぐ、ホイヤン船長がつぶやいた。

「突入コースが決まったか……」

私は良いことを思いついた。
すぐ提案した。

「積んでいるブースターを切り離して、捨てちゃいましょう。宇宙服を着て船外作業十五分です」

ホイヤン船長は、ふふん、という顔になった。

「シャーレイ君。物理学を復習したまえ。むだだ」
そうだ。

ボイシアナ号は、いま等速直線運動している。固体ロケットブースターを捨てても、力を与えない限り軌道は同じだ。

よけいなことを言つて、また、弱みを船長に握られてしまった。
でも、いや。へーき。もうすぐ終わりだし。

「にゃん。人生って良いことがないんだな。急に終着駅とは」

猫男が嘆いた。船長の長いため息が跡を追った。

「あーあ、ボイシアナ号とキャプテン・ホイヤンの名前が歴史に悪名を残すのか……また、女だからって言われるんだろっな……」

「いやよ!」

ティプレイ主任がわめいた。再突入への実感が湧いてきたようだ。
「まだ見てないビデオが残ってる。ホイヤン。船長でしょ! 指揮しなさい」

「指揮って……」

ドライブ主任は、きつとなった。液体ヘリウムが固化したみたい
に、すげー気迫だ。やっぱり、女性は怖いや。子供のころ、ゲーム
を買うのに私がクレジットカードを勝手に使ったのがばれたときの

かーちゃんみたいだ。

とーちゃんは黙って見逃してくれたのに。

「シャーレイの言った、捨てるってのは？」

「ブースターを捨てても軌道を変える機材がない。それに……軌道計算だけで、どれだけ時間がかかるか……」

「じゃあ、別の手で……空間転移よ」

「ぶにゃーん！ 反転しないと無理。進行方向が違う」

猫男が苦笑いしながら言った。ドライブ主任はそれを押さえつけた。

「このまま行くの」

みんな驚いた。

重力源に向かったの空間転移！

転移航法の開発初期に検討されて否定された方法だ。

手つとり早く言えば、目をつぶって重力の井戸に飛び降りる。急な坂道を三輪車で下りながら、思いっきりペダルを漕ぐのに等しい。子供のころ、近所の坂道でやったけれど、たいていカーブを曲がりきれないで二、三回転したあと道路に叩きつけられて、膝の擦り傷に泣いたつけ。

宇宙でも同じだ。

確か、失敗が続いて放棄された方法だった。

そして、ふつうの航路なら空間歪曲については艦隊の探索船がデータを収集して公表しているが、不規則空間転移については航路のデータがない。

でも、船長は決断した。

「やろつ。配置につけ。シャーレイ君。操縦士代理を頼む」

それから、みんなを見渡して、にがく笑った。

「結果がどう出ても、みんな恨みっこなしだぜ」

私も了解の意味をこめて首を縦にふった。操縦士席にすわって、コンソール画面で核融合炉の出力を上げていく。

……でも、あの写真はなんだろ？ 気になる。失敗したら、死ぬ直前で聞いてみよう。と頭に浮かんだけれど、ティプレイ主任の声で我に返った。

「ああ、だめ」

横から見たドライブ・コンソールの四つの円は、激しく飛び跳ねていた。この状態では空間解析ができない。四つの円を安定させなければ。

「ちよつと、待ってて」

ティプレイ主任は、そう言うと自分の船室へ走っていった。手持ち無沙汰の三人が椅子のうえに残った。

沈黙に耐えられなくなったように、猫男がつぶやいた。

「パパベル君。有機体は、きれいだと思わないかね。人類が宇宙に出るのは間違いではないかと、吾輩はつねづね考えている」

デイスプレイの真ん中に映ったりゲル33惑星を見ていた。

「猫男。シャーレイ君は資格試験で環境主任を希望している。講義してやれ」

猫男は私を見た。

「良い心がけだ。見よ。赤外領域を吸収して青く輝く水。それは恒星の核融合にあぶられて蒸気となり凝固して雨となる。白い雲、黒い雲、そこから降る雨。惑星は大きな蒸留器。洗い洗われ、水あふるるなかでシアノバクテリアはストロマトライトになり、酸素を作ったもう。お肌に有毒な紫外線は酸素を分解して、それをオゾンとなす」

「いいぞ猫男。祖先に劇作家でもいたのか」

ホイヤン船長が茶化した。

「灼熱の出来た惑星は時の流れとともに冷え、塩酸の雨は大地のナトリウムを溶かし、すべてを生み出す偉大な塩水となる。鉄は二

価のイオンになりせば、偉大なるオキシジェンにより三価になりて
褐鉄鉱として沈殿す。我、スコップで掘りてコークスと打ち混ぜ火
をつけて鋼材となす」

猫男は不安に立ち向かうようにつつけた。

「鋼は船となり、海に出て網をひっぱってタラを捕る。タラには海
を泳ぐ権利があり、人と猫はタラを食う権利がある。環境倫理学と
は、タラの立場から、惑星の将来を決める学問だ。それさえ知って
いれば、試験で迷うことはない」

私は良く考えて猫男の言うことを咀嚼した。

「つまり、きちんとタラに説明してから、フライになるかスープに
なるか、選択させるってことですね」

「にゃん？ まあ……だいたい、あっている。哲学的にはそんな感
じさ。ただね……」

饒舌な猫男は、言いよんどんでからつつけた。

「人は宇宙を開発するべきか？ という、根本的な問題には依然と
して議論がのこっている」

続けようとして言葉を切ったとき、ティプレイ主任がもどってき
た。ドライブ装置のまえにすわった。

「おまたせ。視覚強化剤、飲んじやった」

「おいっ！」

ホイヤン船長がとがめた。

「らん、らん。まかせて……らんらん」

……視覚強化剤。

眼球のサッカーボール運動と大脳皮質の視覚野を補強して、視覚の時
間分解能を〇、二秒から五倍程度あげて、〇、〇四秒で処理できる
ようになるトリプタミン系薬剤だ。

これを使うとビデオがともきれいに見えるとの噂だ。とくに三
十六型規格との相性が良い。ただし、大脳皮質に負担がかかるため

に、一部の星域では禁止されている。

ティプレイ主任なら、好きそうな薬かもしれない。

副作用はたしか……興奮。

「イエッイイー」

雄たけび、というか、雌たけびというか、片手を上げて叫んだドライブ主任は、空間解析機の操作をはじめた。ノンストップアクションビデオを見たあのように、かなりのっている。

「充填率九十六パーセント」

私は、報告した。

核融合炉は順調で、積層蓄電器も異常なし。

ドライブ主任は計器を早口で読み上げた。

「重力補正、八、五、七、八」

コンソールのディスプレイで四つの円が飛び交っている。

いきなり言われた。

「今よ！」

「えっ？」

四つの円が震えて踊っていた。そんな……言われても、できないよ！

「今だつてば！」

ドライブ主任が、また叫んだ。私の目では追いきれない。空間転移機のスイッチカバーを跳ね上げて構えた。

「いま！」

あわてて、ボタンを押した。

りゅいん。

ぎっく。

ボイシアナ号は十七次元に飛び込んだ。いつもの軽い衝撃のあとに大きなのが来た。

ドライブ主任のいまいましそうな声が聞こえた。

「全然だめ。……あなた、にぶすぎるわ……しーらないっ」と

「ぶにやににやにやーんつく!」

猫男が声をつまらせた。

十七次元の偽り星は見えなかった。中央のディスプレイは暗いままだ。

船長が星のスキャンをはじめた。

「猫男、空間欠陥に注意」

「にや、にや、ふにや。流れ星になったほうが良かった。星が見えなきゃ、位置が確定できない……これ、漂流だぜっ!」

猫男が呻いた。

ホイヤン船長は高速スキャンをつづけた。スキャナーの平面結晶センサーの光感度を上げたようだ。ディスプレイにざらざらの輝点
が明滅しはじめた。

しばらくの沈黙のあと、船長は平然を装って言った。

「うん。シャーレイ君。良くやった。ボイドのなかに飛び込んだだけだ。安心したまえ」

それから、呆然としているみんなを見て、にこりと笑った。

「必ず、もどれる。私を信じろ」

船長がとても良い笑顔で私を慰めてくれた。その気持ちが痛いほどわかった。私のボタンが遅れたせいなのに……もっと運動神経が良かったら。

私の頭の中で破滅の鐘の音が夕暮れの茜色の記憶といつしよに色とりどりの音色の不協和音で鳴って響いて遠くに消えていった。

ああ、私も流れ星になりたい……

でも、現実是不変だ。

だから、気分を変えた。

とりあえず、私のポケットマネーでお茶でも入れて、船長とドライブ主任と猫男に媚を売っておこう。ボイシアナの気まぐれな乗組員がいつまで黙っているか、わからないから。風向きが変わって私が非難されるようになったら、避難できるようにしておかないと。

お茶で誤魔化せるものなら、安いもんだ。

ホイヤン船長は遠慮なしにホットミルクの『大』を希望した。

ディスプレイにかじりついてスキャンをつづけるホイヤン船長は、ドライブ主任に頼んだ。

「ディスプレイ。看護師の服は持っているか？」

「えっ？ うん……」

「メイジ君の様子を見てきてくれ」

ドライブ主任は、シートから浮かび上がった。

「らん」

視覚強化剤の興奮作用がまだ残っているのか、ディスプレイ主任は大きな瞳孔で楽しそうに返事をした。ふわふわと飛びながら船室に帰っていった。

船長はまえを向いたまま保安主任に声をかける。

「おい。猫男。しよぼくれていないで、笑え」

「にゃん……」

「君は、にゃん、しか言えないのか？」

猫男は喉の奥から声を出した。

「かあかあ」

カラスのまねをした。本人はつまらなそうにしているけれど、なかなかうまい。

「よし。猫男。君はカラスだ。飛んでごらん」

船長の命令で猫男はカラスになった。電磁靴の磁石をゆるめると、両手で羽ばたいて天井まで上っていった。

「いいぞ。君はカラスの吟遊詩人」

「……我はオーディンの斥候。一軍のさきがけなり。思考と記憶をつかさどらん。……アーサー王は我が守護神。カラスの鳴かぬ日はあつても夜毎に猫男は人肌のぬくもりを求めんとす。かあかあ。太陽のなか、三本脚のカラスはいずこにありや」

上から、私を見下ろした。猫男にも元気がもどってきたようだ。いつものように軽く話しかけてきた。

「ところで、パパベル君。いつまで王子様をつづけるつもりかね？」

ああ……そうだ。

「船長。顔、洗ってきます」

ホイヤン船長は、ディスプレイをにらんだまま、片手を挙げて応えてくれた。

猫男は天井を押して降りてくると、もとの位置について空間欠陥を見張りはじめた。

私は船室に帰って、裸になった。

シャワー室のなかで顔じゅうを石鹸で洗って化粧を落とした。なかなか、ルージュが落ちない。女性って大変なんだな。毎日、これをやっているなんて。

紫外線で消毒したタオルで体をふいて、作業服に着替えてブリッジにむかう。

とちゅうで気が変わって、医療室に足を運んだ。足を撃たれたメイジ操縦士はだいじょうぶかな？　と思いついたからだ。

ドアを開けると、ピンク色の看護士さんがメイジ操縦士のそばに椅子を置いてすわっていた。

すげー。

ティプレイ主任が、桜色の薄い看護士の服を着ていた。でも、これって医療用って言うより、別の目的のためみたいな服だ。裾が短い。どうして、太ももが見えて、ストッキングを吊っている紐が見えるんだろ？　胸元も広く開いているし……ちょっと怪しい通信

販売で……いや、そうとう怪しいところで買ったように見える。

と言うか……ぜつたいに、これはあれ用だろ。

もう、メイジ操縦士なんか、どうでもよくなった。

「あら、シャーレイ様。メイジは良く寝てます。だいじょうぶみたい。王子様は、やめちゃったの？」

「ええ、作業にはもつたいないから」

「ふーん」

ティプレイ主任は、看護師の服を着たまま、空中に上がると一回転した。頭には看護師さんの帽子をつけていた。

この人、プロだ。肝心なところが見えそうで見えないや。

「とっても似合いますよ」

「そう？」

私は目のまえの白いナイロン繊維に包まれた形の良いふくらはぎを無視した。

思い切って、気になっていることを聞いてみた。

「せ、船長って……」

「あー！ー！」

ドライブ主任はすぐ、楽しそうな声をあげた。

「ホイヤンてね、小さいころは泣き虫だったの」

「えっ！ そうなんですか」

「お家でセントバーナードを飼ってて、泣きながら帰ってくると、ワンコが慰めてくれてモフモフするのが趣味だった」

それから、意味ありげに笑って、つけくわえた。

「だ・か・ら、犬が好きだし、犬になるのも好きなの」

「へー。意外ですね。もしかして、ティプレイ主任が飼い主だったりして」

「だ・め・よ」

天井に手を伸ばして、反動で降りてきた。

「その手には乗らないわ。ホイヤンはすっごいまじめだから、私がしゃべりすぎると、いじめられちゃう。ちよっとしたパーティのハ

ブニングなの」

それからは、何を聞いても曖昧な返事をもらうばかりだった。そのくせ、足を組んだり、ストッキングをずりあげたりして、大人ぶって挑発してくる。

新しい情報は手に入りそうにない

メイジ操縦士はティプレイ看護士にまかせて、ブリッジに行った。壊れたドアをくぐると、猫男が呼びかけてきた。

「かあかあ」

「わん！」

私が犬の鳴き声をまねしてやると、スキャンしていたホイヤン船長がふりむいた。

「ああ、シャーレイ君。猫男と交代してくれ。保安主任、君も少し休んで来い。長くなりそうだ」

保安主任は持ち場をあげた。

「かあ。王子よ。心の眼もってして空間欠陥に立ち向かうのだ。船の安全を守るためだ。光子魚雷はためらわずに撃て。かあ」

保安主任はカラスの声でアドバイスをくれた。冷たく船長がつけました。

「交代は四時間後だ。つぎはティプレイにやらせる」

保安主任代理も楽じゃない。ディスプレイを見つめて緊張しっぱなしだった。交代したあと、がつくりと疲れた。自分の船室にもどって、パジャマに着替えて寝袋にもぐりこもうかと思ったら、誰か来た。

個人船室のチャイムが鳴った。

「かあかあ」

ドアを開けた。

抱き枕を手にした寂しがり屋の猫がいた。お気に入りのピンクのネグリジエを着て、長めのナイトキャップをかぶって、しょんぼり

している。

その姿を見て、どうしようか、迷った。

夜は一人で寝たい。でも、猫男はつつむいて、じっと足元を見ている。

「カラスは……やっぱり……猫の鳴き方が似合っているよ」

「にゃーん」

話しかけて部屋の中に招いてあげると、うれしそうに鳴いた。

「抱きつくのは無しだよ。背中合わせだからね」

私は寝袋に入った。猫男が背中を押し付けてきたので、そのまま、腰の周りを拘束スリングで止めて、離れないようにする。猫男は抱き枕を両手と両足で抱えて、満足そうにごろごろ言っていた。

船室の照明を暗くして、早起きタイマーをセットした。

「ねえ、猫男。……いつから猫になったの？」

「にゃん、子猫のときからかも知れないけど、思い出せるかぎりは生まれたときからさ。にゃん」

「事故のことは、思い出す？」

「……」

返事はなかった。

「ごめん……悪いこと聞いちゃった？」

私の中から呟きが聞こえた。

「いにゃん。吾輩はつねづね、人は宇宙に出るべきではない、と思っ
っている」

「それ、矛盾している。僕たち……」

「にゃん。だから、吾輩は猫になったのさ」

ふーん。

いいかげんそうに見える猫男でも、そんなことを考えていたのか。
「でもさ、なんで、猫になってまで飛び続けるの？ 地球で餌もら
つてれば楽しく暮らせるのに」

奴は体を押し付けようとするとするけれど、無重力でうまく行かない。

「……無辺なる宇宙。それは人類に残された最後のフロンティア。男たちには、空白の地図が必要なのだ。見よ。野望を抱く少年は地表の整然とした秩序のなかで窒息していく。彼ら、そして我らには冒険が必要なのだ。おお、輝く星たちの歌を聴け、足跡のない無垢の世界を勇気と誇りで塗りつぶせ。いまこそ進軍のラッパを轟かせよ……」

猫男は、ぶつぶつとしゃべりつづけた。

その背中のぬくもりを感じながら、私は、猫男が乗っていた『灰色マルハナバチ』の事故を考えていた。

——聞いている範囲では、ボイシアナとは事情がちがうけれど、あれも漂流事故だった。空間転移中に積層蓄電器が焼け落ちて、乗組員たちは、無理に空間復元を行った。もどった場所は通常の航路から二光年ずれていた。

空間転移航法が使えないと、絶望的に遠い距離だった。事態を把握した乗組員の意見は二つに別れた。灰色マルハナバチの船長は個人の判断に任せた。十八人は避難ポットで脱出して、みんな回復不能なほど精神を病んだ。残った八人も二ヶ月は協力しあっていたけれど、一年たつとみんな部屋に閉じこもって心を壊された。

宇宙は広すぎる。

乗組員は、どうしようもない徒労感と絶望に十八ヶ月さらされた。避難ポットを使った人たちはたった一人で。

艦隊の搜索艦がたまたま一年三ヶ月後に救難信号をキャッチして全員を救助した。でも、体に傷一つついていないのに、みんな心に深い傷を負って地球の病院送りになった——

その中から、ただ一人、宇宙に舞い戻った男がいる。

猫男。

医療担当の女の子を美貌の微笑みでだまして静止軌道まで這い上がると、艦隊のデータ収集艦の勤務に退屈して、ステーションの療

養センターで、ふてくされていたホイヤン船長といっしょになって
ボイシアナ号を買い取った。同級生のティプレイ主任——航路開削
艦のドライブ主任をしていたけれど、艦内でみんなから孤立してい
た——を呼び寄せて、もうひとり、薬物で艦隊をクビなつて謹慎し
ていたメイジ操縦士がくわわった。艦隊司令部も、宇宙船で飛び続
けてくれるなら所属はうるさく言わない。

それが、ボイシアナ号のはじまり。

やっぱり、すげーや、この猫。

やっていることはスフィンクスみたいに変態っぱいけれど……

そして、『灰色マルハナバチ』の事故報告書を読んだ船長たちの
一部は、避難ボットを撤去した。深宇宙の事故では、どうせ助から
ない。それならば、みんなで最後まで船に残つて、いっしょに楽し
くやろうぜ。

それがキャプテンたちの合言葉になった。

猫男のいびきがうるさくて、その夜はなかなか寝付けなかった。

だましのキャプテン

だましのキャプテン

翌朝。ブリッジに全員が集まった。

猫男が立ちあがって、経験した事故の概要を語る。

「あふれる倦怠感、そして、全身にみなぎる脱力感。胸に染み入る絶望感」

メイジ操縦士は、まだ痛み止めと化膿止めの抗生物質を使っていた。

猫男はつづける。

「この状態が二ヶ月つづくと、士気は著しく低下して、日常業務すら困難になる」

そして、みんなを見渡した。

「一日でも早く、決着をつけないといけない。にゃーん」

ホイヤン船長が立ち上がった。

「問題点を整理する」

- 一 スキャンの不調により、転移空間でのボイシアナの位置が確定できない
- 二 通常航法装置が乗っ取られて、進行軸を合わせられない
- 三 通常航法装置の回復には、クリーンインストールが必要だが、危険が伴う

「第一の点は、今日から偏移パラメータスキャンに変える」

「にゃん」

「いいですよ」

「……」
猫男は不満そうだが、機関士は乗り気だった。ドライブ主任は下を見ている。

船長がつづけた。

「第二の点、進行軸については、最悪の場合、手動で行う」
「にゃん」

「……」
「……」

猫男は乗り気だが、機関士は不満顔だった。

メイジ筋肉質は言う。もう、傷の痛みはないようだ。

「やってやれないことはないですが、おそらく、自動補正装置が働いて、キャンセルされるかと」

船体を回転させるには、小型ロケット、スラスターの噴射が必要だ。そして、止めるときは正確に逆噴射しなければならない。これは、ボイシアナの計算機がやっていた。おそらく、そのことだ。

「よし。うまくいく可能性は低い、と理解してくれ」

ホイヤン船長がまとめた。

「メイジ機関士、第三のクリーンインストールについてみんなに説明してやってくれ」

船長はすわり、機関士がすわったまま、魔法使いの手で宙に浮いた。

「最大の危険性は、核融合炉の再始動にあります。インストール中は電力供給用の融合炉B、Cを止める。炉の制御回路も新しくなるからです。インストール後に積層蓄電器の電力を使って融合炉Bを再始動させる。ただし、成功するとは限らない。プラズマ偏流のせいです」

ホイヤン船長が付け加えた。

「成功率はおよそ七十五パーセント」

ティプレイ主任が質問した。

「もし、失敗したら……」

筋肉質の機関士が答えた。

「インストール中も止めないでおく船内環境系の一番小さい独立融合炉Aから充電して再始動を繰り返す。ただし、蓄電器が満タンになるまで六〇日かかる。つまり六〇日に一回、再始動を試みることができる」

ドライブ主任が肩をすくめた。

「なんか失敗しそう」

「にゃん、いやな予感がする」

「諸君、あまり悲観的にならないように」

ホイヤン船長がまとめた。ドライブ主任が機関士をひきもどして、席につけた。

次の議題に移った。

「よろしい。クリーンインストールの問題点は理解してくれたと思う。この危険を回避するには、あの二人組みから合言葉を聞きだして、通常航法装置だけ書き換える手がある。その手段は……」

- 一 無理やり聞き出す
- 二 協力的に聞き出す
- 三 だまして聞き出す

「……諸君の意見をどうぞ」

「無理やり聞き出すって、……拷問とか……椅子に縛りつけて生爪をはがして、焼き鑊で、ぷしゅーとか……ビデオでやってたわ……電気でびりびりってのも」

ティプレイ主任が、期待しているような嫌悪しているような複雑な表情で言った。

即座に、猫男が反対した。

「にゃん。保安主任として暴力は推薦できません。ティプレイ主任、あなたが暴行の罪を問われることになります」

「あつ、別に私がやるんじゃないくて、猫男、あなたがやるの。……私は見てるだけ」

「にゃーん！」

猫男は楽しそうに鳴いてから、真顔にもどった。

「暴力はいけません」

「じ、自白薬ってのは？」

薬の好きなメイジ操縦士がよこから口をはさんだ。

猫男が反論した。

「本人の意思に反して、薬物を摂取させるのは暴力と同じとみなされる。それに自白薬は効果が不安定だ。しかし、必要ならば、フードジェネレーターを改造して、自白薬を作ることは可能だ。ただし、……配管の汚染の影響が……みなさんも秘密をしゃべるのは、いやでしょ？」

猫男は立ち上がった。左手の拳を握って、自分の腰にあてる。

「吾輩の推測では、あの二人はチンピラではない。政府の職員でもなさそうだ。おそらく、民間防衛会社の人間。拷問や自白薬についても知識と訓練を受けているものと思われる」

「ふーむ。説得も難しそうだな。だますしかないか……」

船長がため息をついた。

「それだったら、船長の得意技で……」

私が途中まで言ったら、本人から思いつきりにられた。
「にゃん」

「そうだね、パパベル君も良い所に眼をつけてる」

猫男と操縦士が賛成してくれた。

ホイヤン船長は結論をだした。

「まあ、細かいことは、いいや。スキャンをつづける。位置が確定

したら、みんなの意見を聞いて、船長として判断する。それまで、
どうするか自分で良く考えておいて欲しい」

スキャナーとしての船長は、とても腕が良い。でも、二日目には
疲れが浮いて、眼が凹んできた。

三日目、眼の下に軽いクマが浮かんで、唇はかさかさになってい
た。病人みたいだ。

「船長、少し休んでは？」

保安主任代理の当番が回ってきた私は、スキャナー席の船長に声
をかけた。

「うるさいな」

手動でスキャンしていた。遠くの銀河を望遠鏡で捕らえて、その
光と形とスペクトルを記録していく。特徴的な分光特性から、偏移
量を決めて、距離を測っていく。

偏移パラメータースキャンは誤差が多い。でも、二点を確保でき
れば、ボイシアナ号の位置が推定できて、船体軸を回せる。非常手
段として知られているが、実際にやったスキャナーは何人いるか……
二日目に第一ポイントを見つけただけ、もう一点が決まらな
い。

保安主任代理はみんなで交代に務めていた。船長はコンソールに
張り付いたままだ。

猫男は五本、メイジ操縦士とティプレイ主任は二本、私は三本の
光子魚雷を撃っていた。暗くて良く分からない。感を頼りに撃って
いく。残り十二本。

つまりあと三日のうちに光子魚雷が尽きて、空間欠陥に対処でき
なくなる。そうなれば、位置が確定しないまま空間の復元を行わな
ければならない。地球から百億光年離れた場所に出るかもしれない。
そんな場所では、恒星データもないから迷子になってしまう。
思っていたより、早く片付きそうだ。

私は提案してみた。

「ねえ、船長、いつそのこと、あの二人組みに本当のこと話して、協力してもらうとか？」

光電ユニットへ銀河の形を記録中の船長に声をかけた。

「協力するように見えるか？」

「そうですね、いつそビデオみたいに自爆するから、白状しろって、どうでしょう？」

力なく笑い返された。

「計算機があと一分って言って、秒読み、三、二、一、ずーん、か。乗組員は避難ポッドの手前で」

……

……

「……避難ポッド……」

私と船長は同時に気づいた。

二人の乗っ取り犯は、ボイシアナ号に避難ポッドがあると思い込んでいるはずだ。

これは、だましに使える。

いつしよの船に乗っているうちに私も悪い影響を受けてしまったのだろうか？

だましの筋書きはきらめく波のように一気にやってきた。私は頭の中で組み立てて提案した。

「ブリッジに爆弾をおいておけば……時間を制限して二人を焦らせます」

「……奴らの動きを知りたい……」

船長は心えた。

「盗聴器！」

二人で同時に答えがでた。

ディスプレイが瞬くように明滅した。ホイヤン船長の目が笑った。そして、曇った。椅子の上で大きく背伸びをした。

「不確定だが、第二ポイントを見つけた。測度確率68パーセント。ぎりぎりだな」

つぶやいて、背中を丸めた。長く震えるため息。

「船長、休んでください。寝て起きたら、私ができるように手配しておきます」

「シャーレイ君。君も元気だな。こんな状況で憂鬱にならないのか？」

「いや、別に……」

「ふーん」

また、いつもの冷たい眼で見られた。まじめな顔をしている。

「船長は正気でいるのが仕事だ。案外、君は船長に向いているかもね」

「私が船長……いまは船長が船長だから私は船長にはなれませんよ」

「副長になれ。実はね、郵便会社が三つ集まって、商船学校を作らないか、という話が出ている。プリン・キャプテンが乗り気なんだ。どうかな？ 推薦状は書くよ」

「……考えて見ます」

ホイヤン船長は立ち上がって、また背伸びした。

「あとは任せた。少し眠ってくる」

ホイヤン船長は、船長公室にひっこんだ。かわりにメイジ操縦士がきた。計画を話す。乗り気になった。

「よし。俺もしばらく溶接をやっていたいなかったから、避難ポッドのラックを作れば……倉庫の鋼材を切り出して……」

「あ、いえ。それっぽくなっていれば、標識でも充分です」

怪我をしているのに張り切っていたメイジ機関士は、少し不満そうだった。代わりに爆弾のことを話すと了解してくれた。

「あの、本当に爆発しなくてもよいですから見た目だけでも、それっぽく」

「くだいな。分かっている」

凝り性の機関士は片目をつぶった。光子魚雷の担当を変わってもらって、猫男の船室へ行った。呼び出しチャイムを押すとすぐに出てきた。

水色のセーターを着ていた。目を輝かせる。

「にやんっ！ パパベル君。君のほうから遊びに来てくれるなんて、うれしいよ。さあ、ここには猫じゃらしもある。ゆっくり遊んでいきたまえ。吾輩が相手をして進ぜよう」

「いえ、あの盗聴器を」

「にやーん」

がっかりしている猫男に計画を話した。

「さすがはホイヤン船長。悪知恵は一流だな」

ほめられたような、けなされたような不思議な感じになった。

それから、ティプレイ主任の船室に行った。

「おもしろそう。ビデオに撮っておきたい」

主任は踝までの白いローブを着ていた。頭には黄色い三日月のついた帽子をかぶっていた。月の精になっているようだ。

その夜。

一人でゆっくり寝た。

キャプテン・パパベル……うん。悪くない。宇宙開拓史に名を残しちゃったりして……

翌日は一日かけて、細かい打ち合わせと準備を整えた。

夕食のあとから、だまして聞き出すのシナリオがはじまった。

二人組みを閉じ込めた船室のまえで、猫男がインターホン越しに警告した。

「コードネーム。アプリコットとアーモンド。聞こえるかね。吾輩は保安主任のモンゴメリ・アシュトンだ。君らに最後のチャンスを与える。プログラム書き換えの合言葉を教えたまえ」

船室から答えはない。

「乗組員はとても怒っている。君たちどちらかを気密ロックから放り出せ、という者もいる。保安主任として、これ以上押さえ切れない。どうかね、協力しないか？」

しばらく待ってみたが、返事はない。

猫男は私にうなづいた。

私は夕食のトレイを船室の仕切り式の受け取り口においた。憂鬱になった船員が閉じこめられるように、食事の受け取り口も配慮されていた。

夕食は白パンとチキンの腿焼き、ポテトベークンスープにグリーンサラダだ。タラのフライばかり食べさせられていた二人には、久しぶりのごちそうだろう。ただし、冷蔵庫の奥の賞味期限ぎれが材料。

少し良心が痛んだが、ここで、わざと声をかける。

「最後のおしよくし……」

打ち合わせどおり、私の言葉の途中で猫男がインターホンを切った。少し待ってから、もう一度。

「にゃん。明日の朝。船長殿が来る。それまでに態度を決めて置きたまえ」

明朝。全員で朝食をとったあと、二人を監禁している船室のまえに行った。

インターホンを通してホイヤン船長が高らかに命令した。

「おい、二人。協力しろ」

返事はない。

「よし。そのつもりなら、二人とも良く聞け。我々は避難ポッドで脱出する。十七次元は未知の世界だが、仕方がない。君たちが通常航法装置をロックしたおかげで、二十三次元に戻れない。我々は新天地に向かう。おい、聞こえるか！」

返事はない。

「良く聞け。君たちも知っている通り、この船は宇宙艦隊に属して

いた。避難ポッドを作動させると自爆装置も起動する。爆薬と船の操作マニュアルはブリッジに置いた。できるものなら、自分の力で二十三次元に帰れ。……君たちの幸運を祈る」

みんなで足音を立てながら、倉庫にむかった。プライバシーを守るために、船室は完全防音になっているが、この足音なら気づくだろう。

倉庫の奥の床には、積み込んだ資材に隠れるように

避難ポッド↓

の標識が埋め込まれていた。

「どう？ 良い出来だろう」

芸術的ともいえる凝った書体で鉄板の上に銀文字が書き込まれていた。それから、みんなで電磁靴を脱いで、無重力のなかを遊泳してもとにもどった。靴を手にして壁を蹴って、来た通路を帰る。

二人組を閉じ込めている船室のまえをとおり、通路を抜けて、ブリッジの手前の船長公室に集まった。二人組みに感づかれないように、音をたてずに、話もしない。遊泳になれているティプレイ主任が手を引いてくれた。

ホイヤン船長が、ドアを開ける。みんなが入った。ドアをロックする。

準備完了。

船長公室の床には、落ち着いた赤色のカーペットが敷かれている。入り口近くには、応接用の椅子とテーブル。奥には、船長の事務机。そのうえに小型モニターが置かれている。

さらに左手の奥には、船長の個人船室がある。

個人船室の中を見たものは、船長に抹殺される、と噂されている。

みんな事務机の周りに集まった。

船長は、腰から拳銃を取り出し、振り出し式のシリンダーを横に出して、装填を確かめていた。

「にゃん。ソフトポイント？」

船長は、薬莢を取り出して、猫男とみんなに見せた。

「ホローポイントだ」

弾頭が短く、真ん中が凹んでいる。当たると先が広がってひどい傷を負わせる。殺傷能力が高く、跳弾になりにくい。そして、人殺し用の弾だ。

もともとした。

「一発目、二発目は実弾、空砲一発をはさんで、残りは実弾だ」
言い残して、椅子に腰掛け、小型モニターをオンにした。

計画は、うまく、いくだろうか？

「時間だ」

二人組みのいる船室のロックがとける。

猫男が押収していた疎密波盗聴器のスイッチをいれた。

「にゃん。素人は椅子の裏やコンソールに貼り付けるけど、吾輩のようなプロは天井につけるのだよ」

「しー」

猫男はディスプレイ主任にしかられた。

ここからは音だけが頼りだ。二人が引つかかってくれれば……合言葉の声紋を記録して、プログラムの書き換えができる。

ほどなくして、盗聴器からなにか引きずるような音がした。ブリッジのドアをあける音だ。

没収した疎密波盗聴器から、セールスマン「アーモンドの男の低い声が聞こえた。

「くそ。あいつら、何考えてんだか」

フロギンス役人お姉さん「アプリコットの声が答えた。

「ふふ、あの間抜けな王子を見ればわかるだろ。あいつらまともじゃない」

「宇宙はキチガイだらけだ」

二人でブリッジを調べているようだ。かすかに足音がする。

「十七次元で漂流とは、なかなかしゃれたことをしやがって……」
とちゅうまで言った男の声が低い女の声にさえぎられた。

「これか……」

アプリコットの声がして、紙のこすれる音がした。コンソールの上に置いた操船マニュアルを見ているようだ。

「あれが自爆装置か？」

アーモンドの声がした。

「怪しいな……書き換え装置は、どこだ？」

アプリコットの声が応える。

かつん。

金属の音がした。ブリッジの床にある点検孔の蓋を開けた音だ。メイジ主任が真鍮を削りだして作った爆発スイッチらしきものはめ込んでおいた。

「くそ。あと二時間と十九分」

うまく引かなかったようだ。

私の隣で浮かんでいたメイジ機関士が、握りこぶしで親指を立てた。

盗聴器から紙を引き裂くような音がした。

びりびり。

かさかさ。

「アプリコット。自爆までに……うつ、てめ……え」

耳障りなうめき声が聞こえた。仲間割れ？ 息を詰まらせ必死のおかしな声と雰囲気だ。

「シャーレイ君、席を替われ。猫男、いつでも飛び出せるように」
ホイヤン船長はディスプレイの前の席から立ち上がり、拳銃を抜いた。

「にゃん」

猫男が短い警棒をつかんで、並んだ。

ふたたび、盗聴器から音がした。

ぱらり。　ぱらり。　ぱらり。

マニュアルを読んでいるようだ。紙のめくれる音がした。

「ああ、監視カメラがあれば」

ティプレイ主任がつぶやき、船長に、黙っている、と叱られた。船員のプライベートを守るために、船の中にはカメラは設置されていない。見張られている、ということは船員の士気にかかわる。

盗聴器からはかすかな音がもれている。

ぱらり。　ぱらり。　ぱらぱらぱら。

音が途絶えた。

……

……

……

「にゃん。船長、行きましょう」

猫男は促す。ホイヤン船長は眉間にシワを寄せた。初めてみる顔だ。そして、決心した。

「待とう。ボイシアナの状況は変わっていない」

……

……

長い沈黙のあと。

ちりり。

船長公室のモニターから聞きなれないベルの音。

「誰かが気密ロックを開けようとしている」

メイジ機関士が呻いた。

みんなわかった。

「ひでーやつだな……仲間を」

「こ、殺して、捨てるの？」

アプリコットが、何かを気密ロックから捨てようとしている。

「メイジ。何番だ？」

機関士は画面を切り替えた。小さな画面では1番気密室でディスプレイに黄色と赤が点滅して、緑になった。気密ロックが外に開いて、閉じられた。

アプリコットおねーさんがブリッジにもどってきたようだ。

かつん。

また長い沈黙。

……

……

……

……

ブリッジの盗聴器から、音がした。

ぱらぱらぱら。ぱらり、ぱらり

ぱらり

ぱらり

アプリコットがマニュアルを読んでいるようだ。
びり。

また、マニュアルを破いたようだ。

「死ね」

メイジ機関士がのしった。

……

……

かつん。

つりりー。

この音。読み取り装置をいじっているっ！

「合言葉、猫は灰だらけ」

アプリコットの声がした。

ホイヤン船長がふりむいて鋭くささやいた。

「メイジ、確認しろ」

再び画面を切り替えた機関士が答えた。

「書き換わっています。合言葉です！」

「猫男、いくぞ」

船長と猫男は船長公室のドアのロックをはずして、二人は通路に飛び出した。

その瞬間、私は気づいた。

ちがう！ アプリコットは誘っている！

「船長、もどつて罠です！」

すぐ、私は叫んで、ドライブ主任と操縦士を突き飛ばして通路に出た。

開いていたブリッジの奥にスカートをはいている人が、コンソールにすわっているのが、ちらりと見えた。

船長たちはブリッジに飛び込んだ。銃を構えたままアプリコットに走りよる。

「ぎにゃん。だまされた！」

船長室を飛び出た私の左から猫男が叫んで、右上からアプリコットの声がした。

「王子様」

振り向くと、天井近くに浮いていたアプリコットは、右手に何かを握ったまま、口に当てた。

ふっ！

何かが私の右頬をかすめた。

猫男が私を突き飛ばし、ブリッジから飛び出してきたホイヤン船長が天井に向けて撃った。

通路いっぱいに銃声が響いた。

浮かんでいた下着姿のアプリコットは血まみれの左肩を押さえた。
「動くなっ！」

船長の鋭い声が聞こえた。

猫男は、セールスマン「アーモンド」の死体を片付けた。ボイシアナ号の備品庫には何でもそろっている。死体袋でも……。

メイジ機関士はプログラムの修復に忙しい。

ティプレイ主任は、ホイヤン船長に見張られたアプリコットの治療が終わると、食堂で私のために暖かい合成オレンジジュースを作ってくれた。

「にゃん。パパベル君。危なかったね。これだよ」

船長といっしょに戻ってきた猫男は、ラミネート袋に入れた物を見せてくれた。

小指の先ほどの白い小さな丸い塊に、針が突き通っていた。同じ物が二つ入っていた。見つめて考えても何かわからない。こんなものが何の役に立つの？

「なんですか？」

「吹き矢だよ」

「この白い、お団子みたいなのは？」

「ごくふつつの、パン」

船長が紅茶をすすりながら、つぶやいた。猫男がもう一つのラミネート袋を見せてくれた。

「にゃん。アプリコットが鎖骨の窪みに隠していた」

3センチメートルほどの透明な細いケースの中に、銀色の短く細い針が数本入っていた。先の方は赤い液体がたまっていた。

「おそらく、血漿アルブミンに作用する異常タンパク誘発剤……吾輩の個人的意見だが」

船長と猫男の説明で、私にもやつとわかった。

夕食のパン。中の白くて柔らかいところを指でこねて、丸めたものだ。そこに針を刺して吹き矢にして、ちぎったマニユアルの紙を巻いて吹き筒にした武器だ。先端は毒……プリオン生成剤……血管の中で血液のタンパク質を固める毒だ。

「にゃん。原始的だが、近距離なら極めて有効な武器だね。ただ、無重力になれていなかったようだね。狙いが上にそれた」

「すまないな。アプリコットの身体検査したのは私だ。見逃してしまった」

船長が頭を下げ、ほんとうにあやまってくれた。

「にゃん。吾輩の盗聴器も見破られたようだ。思い返すと読まれていた」

「そうだろうな。猫知恵だ。タラばかり食べて、タウリンが足りないんじゃないか」

「にゃん」

私は気を取り直して、二人に聞いた。

「ブ、ブリッジにすわっているのは、やっぱりアーモンド？」

二人はうなづいた。

「上着だけ代えていた」

「気密ロックから捨てたのは？」

「押収物。コンテナが二つ、なくなっていた」

それから、猫男が少し首をかしげて聞いてきた。

「にゃん。君はどうして罠だと」

「わざわざ、合言葉つてつけました」

宙に浮かんで、カモミール茶を飲んでいたティプレイ主任が

「このこと、本に書いたら、売れるかな？」

と、つぶやいた。

メイジ機関士が食堂に来た。

プログラムの修復が終わったことを告げた。

「さて、ドーナッツつと」

自分の保管庫から、二つ取り出した。一人で食べる気だ。

私は尋ねた。

「アプリコットは何を狙っていたんですかね？」

ホイヤン船長は肩をすくめた。

「良くわからない。おそらく、君と猫男と私を針で仕留めて、メイジとティプレイを脅して元にもどるつもりだったんじゃないかな…」

…私と猫男が飛び出したときも一本撃っていた」

「にゃん、通路で二本ひろった。詳しくは艦隊が調べる」

「でも、なんで仲間まで？」

船長は肩をすくめた。

「証人は少ないほうが良い、だろうな」

メイジ機関士がおどけた。

「仲間をやっちまうなんてな。ふふん、チームワークが大切っての知らないんだ」

私たち四人には、疲れた笑いが浮かんできた。

「何のこと？」

「幸いなことにディスプレイ主任はインタビューを知らない。」

賞罰アリ

賞罰アリ

アプリコットは拘束衣につめこんで、催眠剤で眠らせた。

そして、船内時間、午後五時。すべてをかたづけて、全員がブリッジに集まった。船長の招集だった。

「これから、二十三次元への復元をおこなう。みんなも知っている通り、偏移パラメーター航法は誤差が多い。ビーコンが広く散っているベテルギウス中継点に向かう。私のスキャンが間違っていれば銀河系から飛び出すかも知れない。船は漂流し、元へはもどれない。……覚悟してくれ……何か質問は？」

みんな首を横にふった。

核融合炉の出力を上げた。B、Cともにフル出力だ。積層蓄電器に電力を蓄える。

私のまへのディスプレイに赤い文字が浮かんた。私が報告して、機関士が嘆いた。

「区画Dに異常、充填率六十二パーセント」

「またかよ。船長、オーバーホールが必要です」

「……考えておく……」

筋肉質から命令がきた。

「とりあえず、迂回しろ。たどり着くまでもってくれよ」

私は区画Dを切り離れた。残りの蓄電器を使っていく。積層蓄電器は過放電にも過充電にも弱い。

「充填率八十一パーセント復元可能です。負荷率九十八」

「いくわよ」

ディスプレイ、ドライブ主任が四つの円を固定させた。操縦士は船の進行軸を決めた。

りゅいん！

空間が復元された。

正面のディスプレイに見慣れない星空が映った。

失敗……

ビーコンは沈黙している。

ここはどこ？

迷子になった恐怖が押し寄せてきたが、船長の手の動きにあわせて赤色巨星が画面に映し出された。そして、ビーコンがささやいた。一つだけ。

「……やあ、君は宇宙で寂しくないか？ 漆黒の空間ははてしなく広がり、星は彼方に輝く、偉大なる開拓者たちよ、君たちを勇気づけて上げよう、こちらはベテルギウス中継点、ゼブラゼブラポイント。最外郭のビーコン列だ。何か困っていることはないかね？ 力を貸してあげよう。もちろん有料サービスで料金はいただくがね。ぜひ、使ってくれ……」

だいぶ、ずれたけれどビーコンの声が聞こえる。

「誤差六百二十五キロ。やったぜ……もどったっ！」

「私のせいじゃない！」

ホイヤン船長とドライブ主任の声がした。

「シャーレイ君。救難信号を」

意外なことに、船長から命令があった。私は機関士となりから意見をした。

「それ、船長の役目でしょ？」

「君がやってみろ」

いたずらっぽく笑っていた。ほんとに、見てるだけならば、どこまでも付いていきたくなる船長だ。

私は船長席にすわった。みんなをうしろから見るのは気持ちいい。肘掛のカバーを開けて、中から現れた黄色いボタンを押した。宇宙に出るものはみんな知っている言葉がボイシアナ号から発信された。

——ビームしておくれ。故郷へ——

約二十秒後。

返信があった。

「こちらは『あつたか極楽鳥』、プリン船長。ボイシアナ。待っている。すぐ行く。状況を知らせる」

ディスプレイにプリン船長の禿頭が映った。

——思わず、キャプテン・パパベルと名乗りそうになったけれど、それではうそつきになる。ホイヤン船長に席をゆずった。つづけてもう一つの通信が入った。

「こちら、艦隊航路部。救難信号を受けた。ボイシアナ号、応答しろ。他の船は特別周波数帯を開けて聞き取れ」

ホイヤン船長は、高強度量子暗号無線に切り替えた。

「艦隊航路部。良く聞け。秘密無線を希望する」

通信には片道約六秒かかる。ホイヤン船長の要領の良い説明で、艦隊は秘密のうち救助艦『檸檬色アルバトロス』を回してくれた。四時間後、転移空間を通ってきて、固体ロケットブースターをふかした救難艦とランデブーのあとドッキングした。

怪我をしてもメイジ操縦士の腕は確かだった。

マシンガンを胸にかかえた艦隊保安部の隊員が乗り込んできて、

左肩に厚く包帯を巻いたアプリコットお姉さんを担架に縛り付けて運んでいった。中身入りの死体袋も引き渡した。

かわりに、『檸檬色アルバトロス』の食堂からアイスクリームと本物のクラムベリージュースとドーナツが山ほど、ボイシアナ号に送られたてきた。

やっぱり、ボイシアナ号にもアイスクリーム製造機が欲しいな、と思った。

長い減速のあと、ボイシアナ号はベテルギウス中継点、第一ステーションに係留された。艦隊から、一人ずつ長い事情聴取を受けた。

そして、

みんなが艦隊から聞かれているとき、私だけ解放された。

どういうことだ、雑用係りだから軽く見られたのかなと思っていたら、紳士のコードウェイネル郵便査察官が小さな事務室にやってきた。

手紙が重要物資なのだ。

手紙を遅らせてしまったから、言い訳はできない。郵便主任として、私はまず謝った。

「ごめんなさい。いろいろあつて郵便を渡せませんでした」

「まあ、今回は仕方がないでしょう。事情がありましたから。お怪我はありませんでしたか？」

分かってくれそうだ。私は提案した。赤字になってしまいうけれど、免許を守るために船長もわかってくれるはずだ。

「割引料金で、もう一回行っても良いですよ」

「ああ、それは、ありがたいですね。でも無駄です」

郵便査察官は黒縁のめがねのおくで微妙な表情でつづけた。

「ボイシアナ号は、郵便規則九十八条の二に違反しました。免許の

取り消しになります。残念ですが」

えーと。

私は頭の中で考えた。

九十八条の二って、なんだっけ？

ややこしい規則を思い出そうとしていると、

「郵便船は危険物質を運んではならない、との条項に違反しています」

ああ、そんな規則があったのか……手紙が汚染されたら渡せないからね。だれがこんなよけいな規則を作ったんだろう？ いい子ぶった優等生が現場を知らないで勝手に作って、みんなを困らせる。

でも、ここで、はい、そうですか、と返事をする、あとでそれを知った船長に撃ち殺されそうだ。

……屁理屈でも言って乗り切らないと。

「でも、固体ロケットブースターに仕掛けがあったのは知りませんでした。規則には違反していません」

「残念ながら、九十八条の二には例外規定がありません。知らなかったではダメです」

なかなか、手ごわい。私は鞆の中から積荷のリストを取り出した。机のうえに示して論理的に説明した。

積荷の内容を示すインボイスレターには固体ロケットブースター

×3。これが書類上に残っているすべてだ。

「形骸細菌を運んだなんて、ただの噂です。どこから聞いたのですか」

「艦隊司令部からの通知がありました」

うーん。ばれていたか……

……ここは、船長みたいに……強行突破だな
「艦隊がまちがっています」

査察官はめがねの奥で目を光らせた。

「たしかな情報と聞いていますが」

「書類上は問題ありません。ないものはなかったのです。ご心配なく」

郵便査察官はめがねをはずして、ポケットからクリーナーを出してきれいに磨いた。またかけてゆつくりと微笑んだ。

「そう、書類上は問題がありませんね。そこが大事なところです。確認のために来ました」

私の頭の中で、空間転移が起きた。

そういうことか！

やっぱり、この人とは友達になれそうだ。

「おまかせください。郵便の安全は守ります」

郵便査察官はうなづいた。二人でかたい握手を交わした。ひとつ難関をかたづけた、と思っていたら、査察官が

「割引料金で、一回運んでもらえるとのことですが……」

しまったっ！

最初に媚を売りすぎたようだ。先回りしすぎて、よけいなことを言ってしまった。どうしよう、お金にならない仕事を受けたら船長が怒り狂うだろう。でも、査察官の提案は予想外のものだった。

「リゲル33への郵便物は『あったか極楽鳥』へうつして、ボイシアナ号は地球へフル積載、割引率十二パーセントで、お願いします」
やった！

地球―ベテルギウス中継点はメイン航路だ。艦隊の定期便が飛んでいる。高速郵便船は、その先の星域で活躍している。つまり、これはご褒美だ。割引率二十パーセントでも、みんな喜ぶだろう。地球へもどって、またあの青い星が見られる。

でも、やっぱり、政治って汚いや。

アブリコットは艦隊保安部からリゲル33の共同調査委員会に引き渡されて、そこで姿を消した。地表に降りてからの移送中の車を武装集団に襲われて奪回された、とニュースの配信でみた。

ボイシアナ号のみんなは、肩をすくめた。裏には何かある、そう直感したからだ。

リゲル33の対立する両方の政府からボイシアナ号にそれぞれ感謝状が贈られてきた。船長は読みもしないで、金庫の中にしまったようだ。

私たちには、艦隊から戦闘記章が配られた。民間人にはめずらしい処置だったけれど、艦隊チャーター船としていったので、もう資格はあった。メイジ操縦士には、名誉戦傷章もついてきた。そして、副賞として、休暇のために地表におりるシャトル便の切符が二枚ついてきた。

よだれがでそうになる切符がもらえた。

「でもさ。シャーレイ君。なんで査察官との交渉のとき、割引率を七パーセントからはじめなかったんだ？」

私は船長から叱られた。

「でもね、船長。地球ですよ。整備ヤードでゆっくりとボイシアナ号をオーバーホールしてね、とくに積層蓄電器を全面入れ替えして

……」

「金がない……」

機関主任の提案に船長は口ごもった。

積層蓄電器は高速郵便船の心臓だ。入れ替えるくらいなら、船ごと買い換えたほうが安いくらいだ。

みんなで協力して、郵袋と通信販売の貨物を満載したボイシアナ号は200光年を二日で飛んだ。

お疲れの配達人

お疲れの配達人

帰ってきた。帰ってきた。

地球へ。青い海と白い雲の惑星。

地表に降りれば、だいぶ汚れてしまったのがわかるけれども、上から見てる分にはきれいだ。ここには、安心がある。

「ほんと、艦隊ってケチだよな」

ブリッジの船長席でホイヤン船長は、虹色に輝く二枚のチケットを手にして、文句を言っていた。

地表におりるシャトル便の切符。故郷へ帰れる。重力の中で歩いて、風に吹かれて森を歩く。休暇にはぴったりだ。でも、二枚しかない。

一枚の価値は、エリートサラリーマンの年収に匹敵する。艦隊も予算の縮減を受けつついているから苦しいらしい。

「二枚しかない。さて、どうする？」

灰色の瞳で集まったみんなを見た。

そのうちの一枚は、当然、怪我をしたメイジ操縦士のものだ。船長は黙ったまま、一枚を渡した。

「なんか、かすり傷なのに悪いね」

筋肉質の操縦士は、そう言いながら笑って切符を受けとった。

静止ステーションにドッキングしたボイシアナ号のブリッジで残り一枚のチケットを賭けた争奪戦がはじまった。

ゲームを準備して、画面のサイコロをふって順番を決める。

開始前の緊張のなか、船長がみんなを見わたした。

「待ったなしで、なんでもあり。結果は恨みっこなし。得点の高い奴が残りの切符をもっていく。公平だろ」

「にゃん」

となりで猫男がほくそえんだ。奴の反射神経は人間ばなれしている。勝ったつもりでいるようだ。

ゲームは、ディスプレイの上から架空の宇宙艦隊が降りてきて、フェーザー砲を撃ってくる。下からプレイヤーの宇宙船がビームを撃って迎撃するものだ。人類がこのゲームに費やした合計時間を考えると憂鬱になりそうなほど、古くから有名なゲームだ。

一番手の猫男が自慢した。

「保安主任たる吾輩の腕を諸君にみせてあげよう」
ゲームスタート。

すぐ船長が私を肘でつついた。私はさりげなく、

「猫男。今晚、僕の部屋で猫じゃらし、どう？」

「にゃん！」

どごーん。

ふりむいた猫男の宇宙船は破壊された。得点30。

次は私がプレイヤーの席に着いた。すぐ、敵艦隊が現れた。

「王子様、がんばって」

ティプレイ主任の声が聞こえた。へーき。このくらいで動揺するくらいなら、ボイシアナ号の乗組員は務まらない。

敵艦隊を撃破していく。

「チームワークって大切だよな」

船長の声で、一瞬、インタビューのことを思い出して、手がすべった。危ない。

「シャーレイ君、寝言で、船長大好きって言ってたよ。にゃーん」
猫男にとどめをさされた。

どごーん。 得点240

タイプレイ主任の番がきた。腕まくりした魔法使いは妙にうまい。
敵艦隊が次々に消えていった。

ホイヤン船長がささやいた。

「タイプレイのベッドの下には秘密のビデオ」

どごーん。 得点210

船長の番がきた。

このままいけば私がトップで切符を手に行ける。

私は猫男をつぶして、猫男に返された。タイプレイ主任は船長に
じゃまされた。交渉相手はこの人だ。

私はタイプレイ魔法使いに目配せして、ささやいた。

「地表に降りたら、最新のビデオをお土産で買ってきます」

ホイヤン船長は、手首をぶらぶらさせてから席に着いた。

「私に弱点はない。よけいなことをしゃべっても無駄だ」

敵艦隊が現れた。

「青いリングは初恋の味」

私が言っても無視された。得点は110。まだ上がっていく。

「ダビー航路部長」

猫男がつぶやいた。一瞬、船長の動きが止まったけれど、かろう
じて敵の攻撃をかわした。

そして、タイプレイ主任の一言。

「ホイヤンの忘れな草の詩集」

「それは反則だっ！」

船長は顔を上げた。どごーん。

得点250。

ふりむいた船長は、ドライブ主任にいった。

「頼む。絶対に話すなよ」

残りの一枚は、ホイヤン船長が手にした。ティプレイ主任に、ちよつとはにかんだような笑いをむけてから、チケットを大事そうに平らな胸のポケットに収めた。

翌日。

メイジ操縦士は灰色のスーツを着て、ホイヤン船長はコートに毛皮の帽子をかぶって、地球に下りていった。二人ともおめかししていた。遠くからみれば、新婚夫婦のようにも見える。

搭乗口で見送った私は、一晩かけて書き上げておいた両親あての手紙を船長に渡した。何も言わないで受けとってくれた。

中身はごくふつうの手紙だ。私たちが袋に入れて運んでいる多くの手紙と大して変わっていないと思う。でも、それが家族や友達の絆を高める戦略物資になる不思議な紙とインク。

——父上、母上、お元気でしょうか？

僕は元気です。仕事にもなれて、今回は二百光年を飛んできました。いま、地球静止軌道上にいます。地面に降りるにはお金がかかるので行けません。でも、近くにいます。気が向いたら、夜空を見てください。

もう、仕事にもなれて、郵便主任をやっています。いろいろ手続きが大変ですが、まわりがみんな良い人たちばかりで、来年には資格も取れそうです。

宇宙船のことで、いろいろ変な噂が飛んでいるかも知れませんが、僕にはこの仕事が合っているみたいです。

だから、心配しないで。

でも、女の子みたいな名前になって、良く言われます。我が家の伝統なんです、そのへんのこととはわかってもらえないみたいです。

じょうぶで賢い子に育つようと、僕の名前をつけてくれたことを感謝しています。

貴方たちの大事な息子より、愛をこめて……

追伸、妹よ、父上と母上の言いつけに良く従い、遅刻をしてはいけないぞ――

船長と操縦士はシャトル便で地表に降りていった。

残った私たち三人は、宇宙服を着て真空の中に飛び出すと、ボイシアナ号の黄色い違い輪の船体標識をドーナッツを食べる怖い青リンゴに書き換えてやった。

地表から帰ってきた二人を驚かせるために。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580r/>

高速郵便船ボイシアナ号——魔界の住人——

2011年3月23日02時10分発行